

# 鏡水原遺跡

—那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—

令和5(2023)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、那覇空港自動車道（小禄道路）の建設に伴い、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが令和3年度に行った鏡水原遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

本遺跡の所在する那覇市小禄鏡水は、かつては鏡水集落の耕作地が広がり、鏡水大根（カガンジデークニ）の産地として有名となっていました。しかし、昭和初期に始まった小禄飛行場の建設や戦時中の米軍による攻撃、戦後の造成等により往時の面影は失われてしまいました。

戦後は米軍基地となり、沖縄の本土復帰後は自衛隊基地として利用されてきたことから、当初は遺跡の有無は明らかではありませんでした。そのため、事前の試掘調査を実施したところ、縄文時代と近世～近代の遺跡があることが分かり、記録保存調査を実施することとなりました。

令和3年度は、平成30年度に調査を行った地区の北側及び西側隣接地に調査区を設置し、調査を実施した結果、近世以降の耕作地や道路に関する溝や石列のほか、近代の石組などの遺構が見つかり、当時の集落での生業をうかがい知る資料が得られました。また、縄文時代の土器や石器も見つかり、縄文時代にも周辺で生活が営まれていたことが分かりました。本報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、文化財の保存や活用の一助となれば幸いです。

最後に、現地調査から資料整理にあたり、御指導、御協力を賜りました関係機関及び関係各位に心より感謝申し上げます。

令和5（2023）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 前田 直昭

## 例 言

1 本報告書は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所による那覇空港自動車道（小禄道路）建設工事に際して、鏡水原遺跡の記録保存を目的とした発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。

2 本発掘調査および資料整理業務は、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所と沖縄県が委託契約を交わし、沖縄県教育庁文化財課の指導のもと、那覇市教育委員会など関係者の協力を得て、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3 現地での発掘調査は令和3年度に実施し、資料整理作業・発掘調査報告書作成は令和4年度に実施した。

4 本書に掲載した地図データ（第2図）は国土地理院の電子国土 Web システムから配信されたものを使用している。

5 本書に掲載した1944年撮影航空写真（第3・30図）は、沖縄県公文書館より提供されたものである。

6 本書に掲載した航空写真（第4・5図）は国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスから配信されたものである。

7 本報告で掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

8 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づく。第3章に掲載した遺構の土色・観察所見は、遺構一覧表（第1・2表）に示した。

9 本報告書の編集は、当センター埋蔵文化財資料整理員の協力を得て、田村薰、城間宏次郎が行った。執筆は、下記以外は城間が行った。

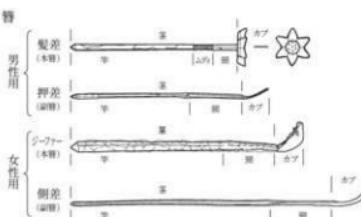
### 第3章 第4節 自然遺物…亀島慎吾

10 本報告書に掲載された写真は、現地調査状況を田村薰、城間宏次郎、我喜屋優真が撮影した。遺物写真是田村薰、伊藤恵美利、小橋川里江が撮影した。X線写真是田村が撮影した。

11 各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめた。

12 現地調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

### 簪の部位名称



# 目 次

## 序 例言

### 第 1 章 発掘調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査体制	1
第 3 節 発掘作業の経過	2
第 4 節 資料整理作業の経過	2

### 第 2 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的環境	3
第 2 節 歴史的環境	3

### 第 3 章 発掘調査の方法と成果

第 1 節 調査の方法	8
第 2 節 基本層序	8
第 3 節 遺構と遺物	14
1 遺構	14
2 遺物	25
第 4 節 自然遺物	38
1 脊椎動物遺体	38
2 貝類遺体	40

### 第 4 章 総括

第 1 節 遺構	42
第 2 節 遺物	42
第 3 節 結語	42

引用・参考文献	44
巻末図版	47
報告書抄録	76

# 挿 図 目 次

第 1 図 沖縄県位置図	4
第 2 図 鏡水原遺跡の位置及び周辺の遺跡	5
第 3 図 1944 年撮影航空写真	6
第 4 図 1977 年撮影航空写真	7
第 5 図 2010 年撮影航空写真	7
第 6 図 米軍作成地形図（1948 年）	7
第 7 図 調査区設定図	9
第 8 図 土層断面図 1	10
第 9 図 土層断面図 2	12
第 10 図 近世～近代の遺構と出土遺物	16
第 11 図 石組 1 平面図・断面図	18
第 12 図 石組 2 平面図・断面図	18
第 13 図 SS 1 平面図・立面図・断面図	19
第 14 図 SD 1 平面図・断面図	19
第 15 図 ピット（近世～近代）平面図・断面図	19
第 16 図 護文時代の遺構と出土遺物	20
第 17 図 ピット（護文時代）平面図・断面図	22
第 18 図 石組 1 出土遺物	30
第 19 図 SD 1 出土遺物	30
第 20 図 SDII 出土遺物	30
第 21 図 SDI2 出土遺物 1	32
第 22 図 SDI2 出土遺物 2	33
第 23 図 SDI3 出土遺物	33
第 24 図 I 層出土遺物 1	35
第 25 図 I 層出土遺物 2	36
第 26 図 II - 1 層出土遺物	37
第 27 図 II - 2 層出土遺物	38
第 28 図 SP92 出土遺物	38
第 29 図 IV 層出土遺物	38
第 30 図 1944 年撮影航空写真と近世～近代の遺構重ね図	43

## 挿表目次

第 1 表 遺構一覧 1	23
第 2 表 遺構一覧 2	24
第 3 表 出土遺物集計表 1	25
第 4 表 出土遺物集計表 2	26
第 5 表 出土遺物集計表 3	27
第 6 表 出土遺物集計表 4	28
第 7 表 出土遺物集計表 5	29
第 8 表 SD12 出土遺物観察一覧	31
第 9 表 I 層出土遺物観察一覧 1	34
第 10 表 I 層出土遺物観察一覧 2	35
第 11 表 II - 1 層出土遺物観察一覧 1	36
第 12 表 II - 1 層出土遺物観察一覧 2	37
第 13 表 脊椎動物遺体種類一覧	38
第 14 表 魚類出土状況	38
第 15 表 鳥類・哺乳類出土状況	39
第 16 表 貝類の生息場所類型	40
第 17 表 卷貝出土状況	40
第 18 表 二枚貝出土状況	41
第 19 表 陸産貝出土状況	41
第 20 表 卷貝出土一覧	75
第 21 表 二枚貝出土一覧	75
第 22 表 陸産貝出土一覧	75

## 図版目次

図版 1 作業状況 1	47
図版 2 作業状況 2	48
図版 3 作業状況 3	49
図版 4 作業状況 4	50
図版 5 作業状況 5	51
図版 6 作業状況 6	52
図版 7 遺構 1	53
図版 8 遺構 2	54
図版 9 遺構 3	55
図版 10 遺構 4	56
図版 11 遺構 5	57
図版 12 遺構 6	58
図版 13 遺構 7	59
図版 14 遺構 8	60
図版 15 遺構 9	61
図版 16 遺構 10	62
図版 17 壁面	63
図版 18 出土遺物 1	64
図版 19 出土遺物 2	65
図版 20 出土遺物 3	66
図版 21 出土遺物 4	67
図版 22 出土遺物 5	68
図版 23 出土遺物 6	69
図版 24 出土遺物 7	70
図版 25 出土遺物 8	71
図版 26 出土遺物 9	72
図版 27 脊椎動物遺体	73
図版 28 卷貝	74
図版 29 二枚貝	75

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

国道331号線は那覇市街地と沖縄県南部を結ぶ国道であり、そのうち小禄バイパスと呼ばれる区間は、那覇市街地と豊見城市・糸満市を結ぶとともに那覇空港への通行路でもある。しかし、県内の観光客の増加、豊見城市・糸満市の発展などの影響による交通渋滞が問題視されている。そのため、内閣府沖縄総合事務局南部国道事務所（以下、南部国道事務所）は、高規格幹線道路である那覇空港自動車道（国道506号線）を「小禄道路」として延伸することで対策を図ることを平成21年度に決定し、平成23年度より事業に着手した。

それに伴い、工事予定地について、南部国道事務所から那覇市市民文化部文化財課（以下、市文化財課）に対して平成27年6月5日付府国南事第607号により埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受け市文化財課は、対象地が戦後に米軍基地を経て陸上自衛隊基地となっていることから埋蔵文化財について事前の把握ができるいなかったため、平成28年9月から翌29年3月まで試掘調査を行った。その結果、ミノンヒモ古墓群、らくだ山戦争遺跡群A地点、らくだ山戦争遺跡群B地点、鏡水溜屋原B遺跡、鏡水原遺跡、鏡水増過原遺跡が新たに確認されたことから、平成29年4月28日付埋蔵文化財事前審査報告書（事前審査番号27-121-1）により那覇市教育委員会（以下、市教委）から南部国道事務所に複数の埋蔵文化財が所在する旨の回答を行った。

南部国道事務所は平成29年8月1日付府国南事第792号により本発掘調査（以下、本調査）を那覇市に依頼したが、那覇市は同年8月14日付那市文財第168号による回答で、市文化財課の体制で依頼に対応するのは困難とした。そのため南部国道事務所、市文化財課、沖縄県教育庁文化財課（以下、県文化財課）、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）によって調整が行われ、平成30年10月29日付府国南事第995号により南部国道事務所から沖縄県に対し本調査依頼が提出された。

今回報告する鏡水原遺跡は平成30年度に県埋文センターが本調査を実施し、その結果、当初の想定よりも遺跡範囲が北側に広がることが判明した。遺跡範囲が広がる部分の取り扱いについて南部国道事務所と市文化財課が協議し、令和2年度に市文化財課によって範囲を確認するための試掘・確認調査が実施された。その成果を基に南部国道事務所、市文化財課、県文化財課、県埋文センターによって今後の本調査に向けた調整が行われた。

沖縄県教育委員会（以下、県教委）と南部国道事務所は、「那覇空港自動車道「小禄道路」建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査委託に関する協定書」を令和3年3月31日付で締結し、この中で鏡水原遺跡における発掘作業を令和3年度までに終了。遺物の整理及び発掘調査報告書類作成を令和5年度までに完了するものとした。その後、沖縄県と南部国道事務所は「令和3年度小禄道路（鏡水原遺跡）埋蔵文化財発掘調査業務」の契約を令和3年4月1日付で締結した。

### 第2節 調査体制

本報告の鏡水原遺跡の発掘調査は、令和3年度に現地での発掘作業を行い、令和4年度に資料整理・報告書作成を行った。実施体制は以下のとおりである。

#### 令和3（2021）年度（発掘調査）

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 金城弘昌

**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課

課長 諸見友重

記念物班 班長 仲座久宜

主任専門員 金城貴子

**調査所管** 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 瑞慶覧勝利

総務班 班長 池田みき子

主任 石原昌一郎

調査班 班長 中山晋

主任 田村薰

専門員（臨任）城間宏次郎

発掘調査作業 斜跡・埋蔵文化財調査員

我喜屋優真

**発掘調査支援業務委託** 国際文化財株式会社

主任調査員 村尾政人

調査員 大森菜央

管理技士 多田和幸

#### 令和4（2022）年度（資料整理）

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶋満

**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課

課長 瑞慶覧勝利

記念物班 班長 仲座久宜

主任専門員 金城貴子

**調査所管** 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 前田直昭

総務班 班長 池田みき子

主任 石原昌一郎  
調査班 班長 中山晋  
主任 田村薰  
専門員（臨任）城間宏次郎  
資料整理作業 埋蔵文化財資料整理員  
赤嶺雅子、安次嶺沙織、伊藤恵美利、小橋川里江、  
小波津由加里、又吉純子  
**資料整理協力者（所属等は当時）**  
亀島慎吾（沖縄県立埋蔵文化財センター）  
丸山真史（東海大学）

### 第3節 発掘作業の経過

発掘調査着手に向け、発掘調査支援業務委託の発注や沖縄県赤土等流出防止条例に基づく事業行為通知書の届出等の準備を行った。

調査は令和3年10月14日から令和4年1月28日まで実施した。調査着手後は令和3年11月4日付埋文第460号にて沖縄県教育委員会教育長（以下、県教育長）あてに文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査着手の報告を行い、調査終了後は、令和4年2月2日付埋文第652号にて、県文化財課長を経由し、令和4年2月15日付教文第1522号で県教育長より豊見城警察署長へ埋蔵文化財発見の通知を行った。

なお、現地作業は発掘調査支援業務として県埋文センター職員の管理のもと、国際文化財株式会社が実施した。以下、調査の進捗について記す。

#### 令和3年

- 4月 1日 南部国道事務所と沖縄県間で「令和3年度 小禄道路（鏡水原遺跡）埋蔵文化財発掘調査業務」の契約を締結。  
4月 21日 県埋文センター、県文化財課、南部国道事務所で現地での調整を行い、調査区周辺の環境整備、他の工事等の今後の工程計画等の条件について協議。  
9月 10日 南部国道事務所に再委託承認申請書を提出。  
9月 13日 県埋文センターと国際文化財株式会社間で発掘調査支援業務委託を締結。  
9月 19日 現地での測量作業を開始。  
9月 29日 南部国道事務所、県文化財課、県埋文センター、国際文化財株式会社、工事業者で現地での調整を行い、調査範囲や工程計画等について協議。  
9月 30日 現場の草刈り、機材搬入、電気配線工事を

行う（～10月13日）。

- 10月 6日 沖縄県赤土等流出防止条例に基づき、沖縄県南部保健所（以下、南部保健所）に事業行為通知書を提出。  
10月 11日 南部保健所から確認済通知書が通知される。  
10月 14日 重機を用いて調査区のアスファルト撤去、磁気探査、表土掘削を開始（～20日）。  
11月 4日 埋文第460号により発掘調査の着手を県文化財課に報告。市文化財課にも事務連絡。  
11月 10日 人力での包含層掘削を開始。  
12月 16日 高所作業車を用いて、調査区の遺構検出写真を撮影。撮影後、遺構掘削を開始。

#### 令和4年

- 1月 21日 高所作業車を用いて、調査区の遺構完掘写真を撮影。  
1月 25日 埋戻し作業、現場撤収作業を開始。  
1月 28日 埋戻し完了。写真を撮影し現地作業を終了。  
2月 2日 埋文第652号により発掘調査の終了を県文化財課に報告。市文化財課にも事務連絡。  
2月 15日 教文第1522号により、県教育長から豊見城警察署長へ埋蔵文化財の発見について通知を行う。

### 第4節 資料整理作業の経過

資料整理作業は令和4年度に遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測、写真撮影等を行った。

これらの作業と並行して、原稿執筆や遺構図等のトレースを進め、発掘現場で撮影した写真と併せて報告書全体のレイアウトを完成させた。その後、一般競争入札により印刷業者と契約を行い、報告書を刊行した。

以下、資料整理作業の進捗について記す。

#### 令和4年

- 4月 1日 南部国道事務所と沖縄県間で令和4年度の契約を締結し、資料整理作業を開始。  
4月 記録類の整理、遺物の整理および実測・トレースを実施。  
5月～12月 遺構図のトレース・レイアウト編集、遺物の写真撮影、集計表の作成と並行して原稿執筆、全体のレイアウト編集を実施。

#### 令和5年

- 1月 原稿、図面の校正を実施。  
1月 12日 有限会社サン印刷と契約。  
1月 19日 入稿  
3月 17日 刊行

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

鏡水原遺跡は、沖縄本島南部の那覇市小禄鏡水に所在する。那覇市は沖縄県の県庁所在地であり、総人口が令和4年7月末時点で317,406人、推計面積は首里市及び小禄村が編入された昭和29(1954)年時点では22.63haだったが、埋め立て等により、現在では41.42haに至っている。当該遺跡の東側には陸上自衛隊那覇駐屯地があり、西側には沖縄都市モノレール（ゆいレール）那覇空港駅、さらにその西側には沖縄県の玄関口である那覇空港が所在する。

気候は年間平均気温23℃、年間降水量2000mm前後で、亜熱帯モンスーン気候に属する。地質は第三紀中新世の島尻層、第三紀中新世から第四紀洪積世の琉球層群琉球石灰岩及び沖積層で形成される。地形は北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地及び小禄台地が閉むような地形をなす。これらの台地上から西海岸へ安瀬川、久茂地川、国場川等が流れ、河川周辺に沖積地を形成している。特に国場川と鶴波川の合流地点には汽水干潟の漫湖が形成され、昭和57(1982)年に国指定漫湖鳥獣保護区、平成11(1999)年にはラムサール条約にも登録されている。さらに国場川河口は大きく開いた天然の良港であり、グスク時代以来、那覇港として琉球・沖縄第一の港となっている。

鏡水原遺跡は、地質上では島尻層の西端部に所在しており、その西側には標高2~3m程度の沖積層となる。当該遺跡北側には琉球層群琉球石灰岩が微丘陵上に分布している。

### 第2節 歴史的環境

鏡水一帯は先史時代から近代まで連綿と遺跡が確認されている。繩文時代早期から中期の遺跡には鏡水箕隅原C遺跡があり、当該期の貝塚が確認されている。なお、この時期は縄文海進期に当たり、現在より2~3m程度海水面が高かったことが確認されている（沖縄県立埋蔵文化財センター編2019）。

海水面が低下とともにサンゴ礁が水面に達していく繩文時代後期・晩期の遺跡には、鏡水箕隅原A遺跡と鏡水名座原A遺跡が挙げられる。前者は伊波式土器を主体とし、後者は荻窓式土器から室川式土器を主体としており、主体となる時期に違いが認められる。また、鏡水箕隅原C遺跡には弥生~平安並行時代前半期の遺構・遺物も確認されているほか、同時代後半期からグスク時代初頭の遺跡には沖縄における初期農耕の痕跡が確

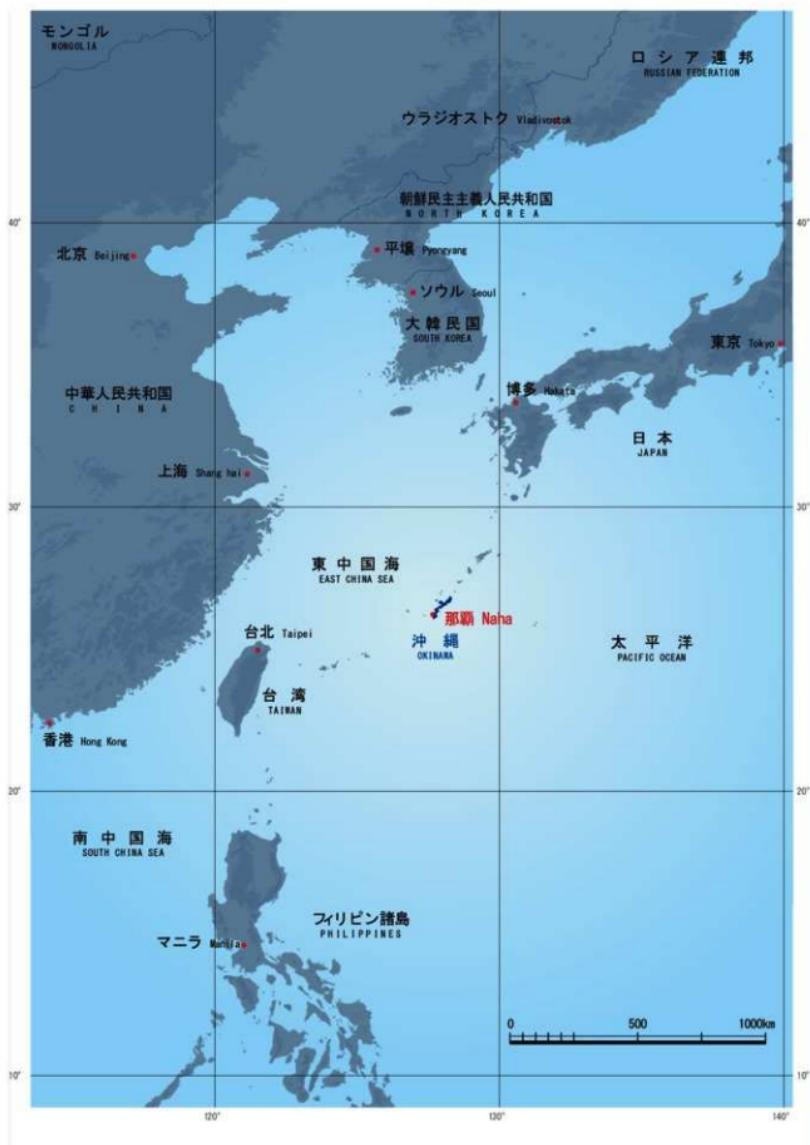
認された那崎原遺跡が確認されている。

文献上の鏡水は、『琉球国由来記』(1723年編纂)において、儀間村中の箕の形に似た洞穴が地名の由来であること、この洞穴には觀音像と拜殿があることが記載された記事が初出である。この伝承は、『琉球國舊記』(1730年編纂)にも箕隅宮の節や『遺老說伝』にも同様の記載があり、上記の洞穴が高台の下にあることが述べられている。そしてこの高台は、東恩納寛惇『南島風土記』によれば先原崎を指すことが述べられている。

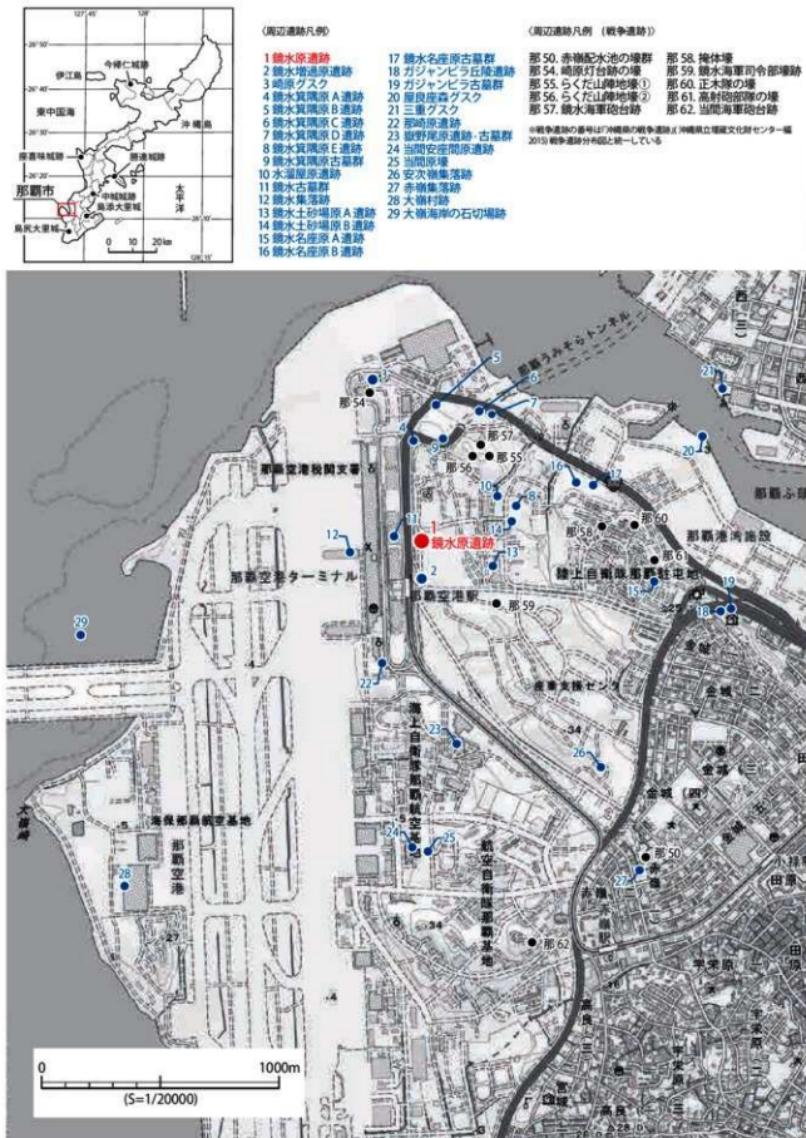
鏡水は安次嶺村内の鏡水屋取として開墾され、近世から近代初頭までは琉球王国に私有地と認められた土地である仕明地であったとされる。その後、明治36(1903)年の土地整理によって、当時小禄間切安次嶺村であった鏡水原・伊保原・前原と、儀間村であった蚊阪・名座原・下田原・箕隅原・土砂場原・増過原・水溜屋原・崎原を統合して新たに鏡水村が設置された。さらに明治41(1908)年には、町村制施行によって小禄村字鏡水となっている。鏡水は農業を基幹産業としており、特に大根は「鏡水ダイコン」として全県的に知られた名産物であった。他に製糖業も盛んに行われていた。（鏡水自治会1983）

昭和6(1931)年の小禄飛行場建設により、鏡水の一部が接收され、さらに昭和10、13、16年に拡張工事が行われ、それぞれの字の一部が接收された。また飛行場周辺には日本軍の壕が構築された。このように軍施設が集中していることから、米軍の攻撃に晒され、集落は戦禍とその後の米軍による造成によって消失している。

戦後は鏡水の過半が米軍基地内となり、沖縄の本土復帰後は陸上自衛隊那覇駐屯地として今日に至っている。



第1図 沖縄県位置図



第2図 銀水原遺跡の位置及び周辺の遺跡



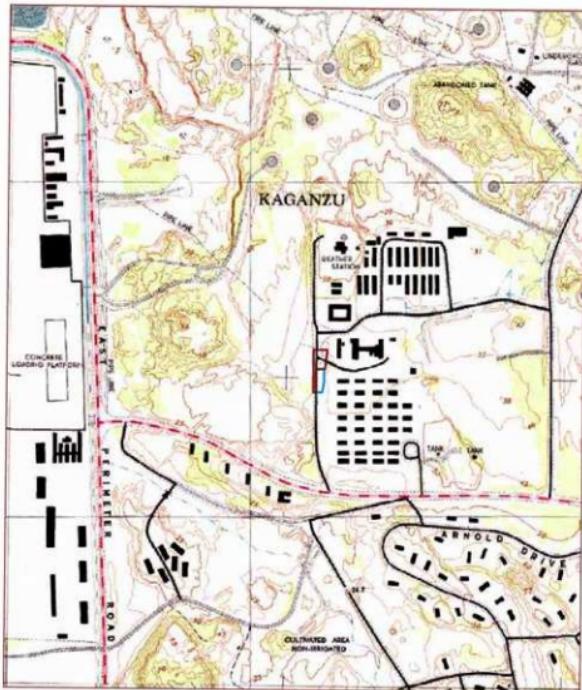
第3図 1944年撮影航空写真 (青枠が平成30年度、赤枠が令和3年度の調査区)



第4図 1977年撮影航空写真  
(青枠が平成30年度、赤枠が令和3年度の調査区)



第5図 2010年撮影航空写真  
(青枠が平成30年度、赤枠が令和3年度の調査区)



第6図 米軍作成地形図(1948年) (青枠が平成30年度、赤枠が令和3年度の調査区)

## 第3章 発掘調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

**調査区の設定** 平成30年度の調査では、調査区の北側及び北西側に繩文時代と考えられる地層（IV・V層）が検出され、その範囲は調査区外にも広がることが確認された。令和2年度に市文化財課によって実施された試掘・確認調査の成果を踏まえて、今回の調査では平成30年度に設定した調査区の北側及び西側隣接部に調査区を設置し、IV・V層の範囲と遺構確認を目的とした。

**調査の工程** 調査区の設定後、舗装道路をアスファルトカッターで切断し、重機を用いてアスファルトを撤去した。撤去後、磁気探査を実施して確認した異常点を除去した後、重機で地表下0.5mまで表土掘削を行った。

表土掘削後、調査区西側にサブトレンチを設定して、地山もしくは岩盤が確認できる深さまで重機で掘削し、堆積層の確認・把握を行った。確認後は作業員の手作業による包含層掘削と遺構検出を実施した。

検出状況の記録後、遺構掘削は人手による半截あるいは畔を残しながら掘削し、土層堆積状況の記録をした後に完掘を行った。

**写真撮影** 写真撮影はデジタルカメラと35mmフィルムカメラによる白黒フィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影した。高所作業車による調査区全景の写真撮影時には中判フィルムカメラも用いた。なお、デジタルカメラの撮影時はグレーカードを写しこみ、RAW現像処理による補正を施している。

**実測** 現場での実測作業については、県埋文センター職員の管理の下、支援業者である国際文化財株式会社が行い、現地で確認・指示を行った。平面図・断面図の作成は測量機器を用いて行い、効率が良いと考えられる場合は写真測量も実施した。

**整理作業** 出土遺物については、注記を行った後に接合作業を実施した。接合作業を経て、掲載遺物の選別・実測、デジタルトレース、写真撮影、集計作業を行った。また、支援業者により作成された遺構等の図面については、イラストレーターを用いて報告書に掲載する縮尺や線の太さ等の修正を行った。

### 第2節 基本層序

今回の調査では平成30年度の調査で設定された基本層序を踏襲したが、調査結果を踏まえて一部修正し、以下のように層序を設定した。

なお、今回の調査では平成30年度調査時に設定されているIII層（グスク時代相当）とV層（繩文時代の無遺物層）は確認できなかった。

**I層**：戦後から現代にかけての造成土、表土、攪乱層。I層内でも戦後の造成土、米軍基地時代の路盤材、自衛隊基地時代及び現在の路盤材・アスファルト等時期差がみられるが、今回はそれらをまとめてI層とした。また、調査区の所々にごみ穴と思われる攪乱があり、そこから集中して遺物が出土しているが、それらもI層の遺物として回収した。

**II・1層**：近代の耕作土と考えられる。

Hue10YR4/6 褐色、シルト、しまりは良く粘性は無い。主に調査区の北・南・東側に堆積する。西側では戦後の土地改変の影響を受けて消滅していると思われる。焼土粒、炭粒、白砂、0.5～1cm大の石灰岩礫が入る。

**II・2層**：近代の耕作土と考えられる。

Hue10YR5/6 黄褐色、シルト、しまりは良く粘性は無い。SS 1を境に調査区の北西側で確認できた。炭粒、焼土粒が少量混ざる。直上に現代の路盤材が散かれていることから、上部の堆積は工事の影響を受け消滅していると思われる。

**II・3層**：近世～近代の耕作土と考えられる。

Hue7.5YR5/6 明褐色、シルト、しまりはやや悪く粘性は有り。マージブロックが多く入る。調査区東壁でのみ確認できた。遺物は得られていない。

**IV層**：繩文時代相当の堆積層。

Hue10YR 3/4 暗褐色、シルト、しまりは良く粘性は有り。炭粒、焼土粒が入る。先史土器片が出土している。主に調査区の中央付近で確認でき、そのほか調査区西壁で僅かに堆積が見られた。直上にI層が堆積していたため、上部の堆積は戦中～戦後の土地改変によって消滅していると思われる。この層とVI-1、VI-2層の境でピットを多数検出している。

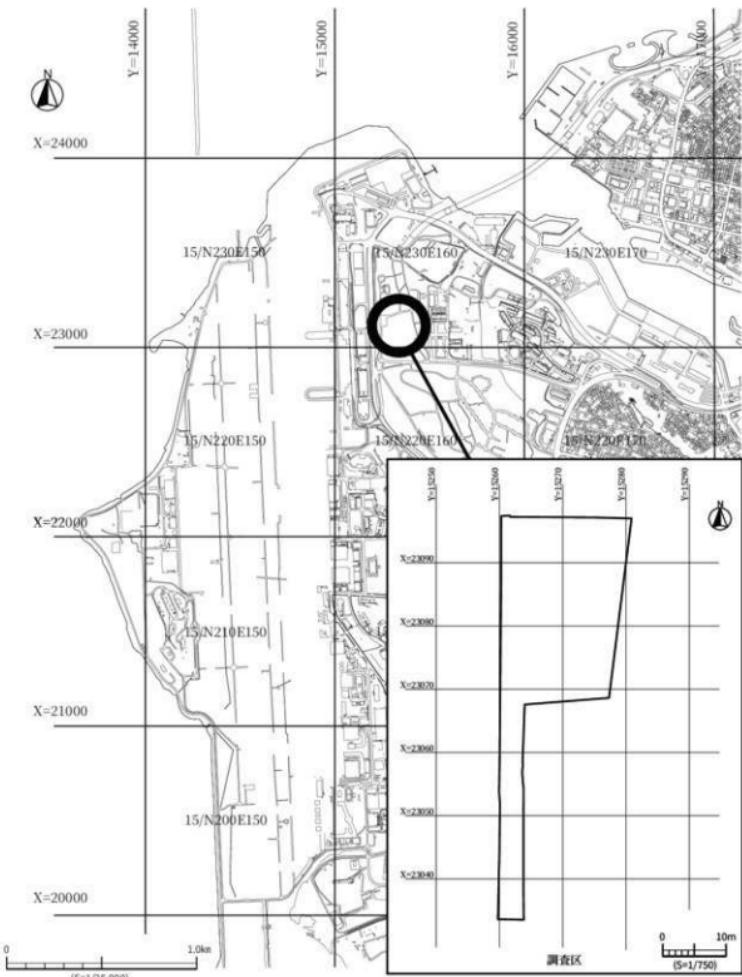
## VI-1層：島尻マージの地山。

Hue10YR4/6 暗褐色、シルト、しまりは良く粘性は有り。全体的に黒いシミ状のスジが入る。IV層下の一部と調査区西壁北側で確認できたが、遺物等は入っていないかったため地山が変色した土と考えられる。中央ベルトのみ土色の若干の違いからVI-1a、VI-1bと分けている。

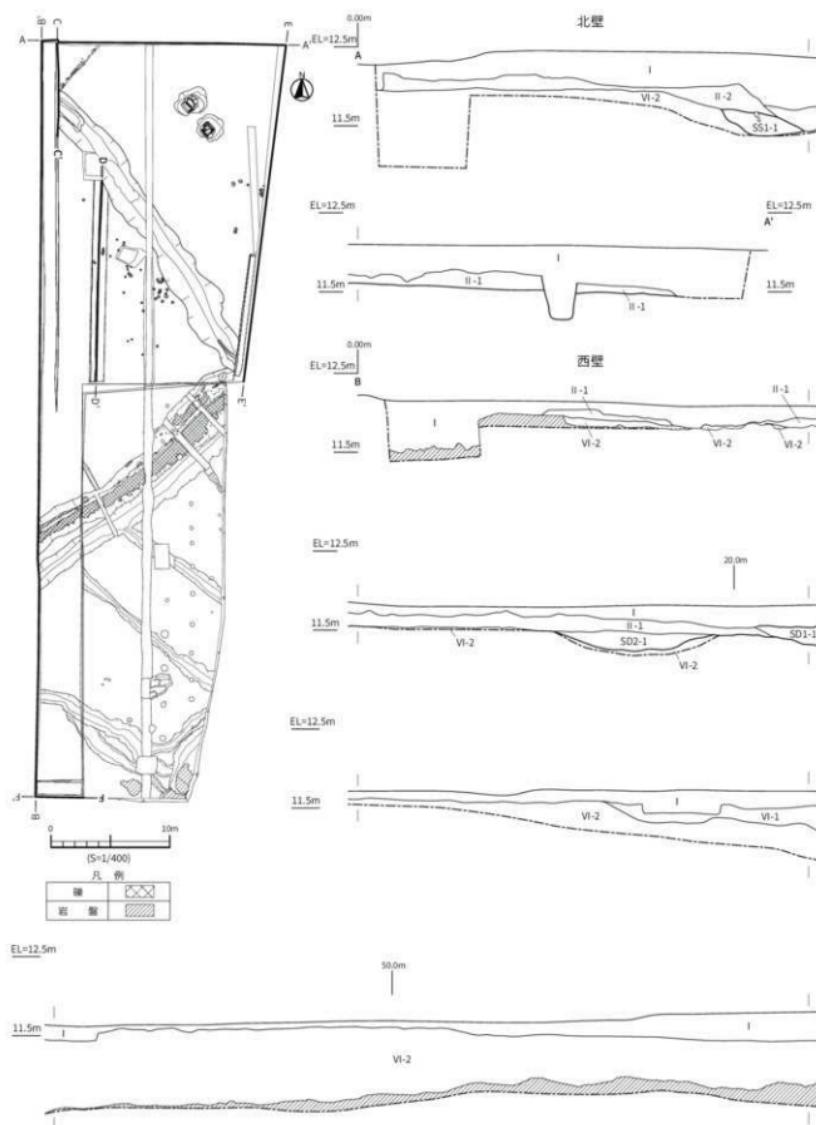
## VI-2層：島尻マージの地山。

Hue7.5YR5/6 明褐色、シルト。場所によってしまりや粘性に違いが見られ、細分可能だが今回はそれらを一括してVI-2層とした。地山の赤土。

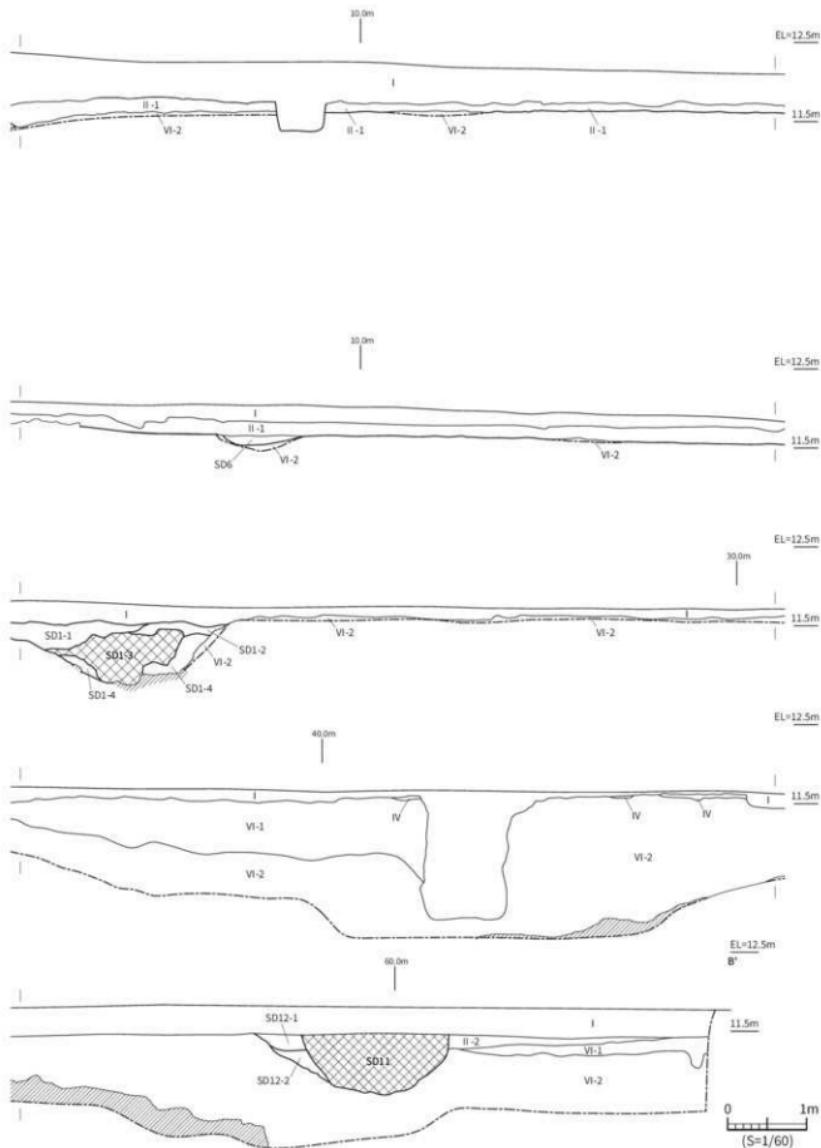
## VII層：琉球石灰岩の岩盤。

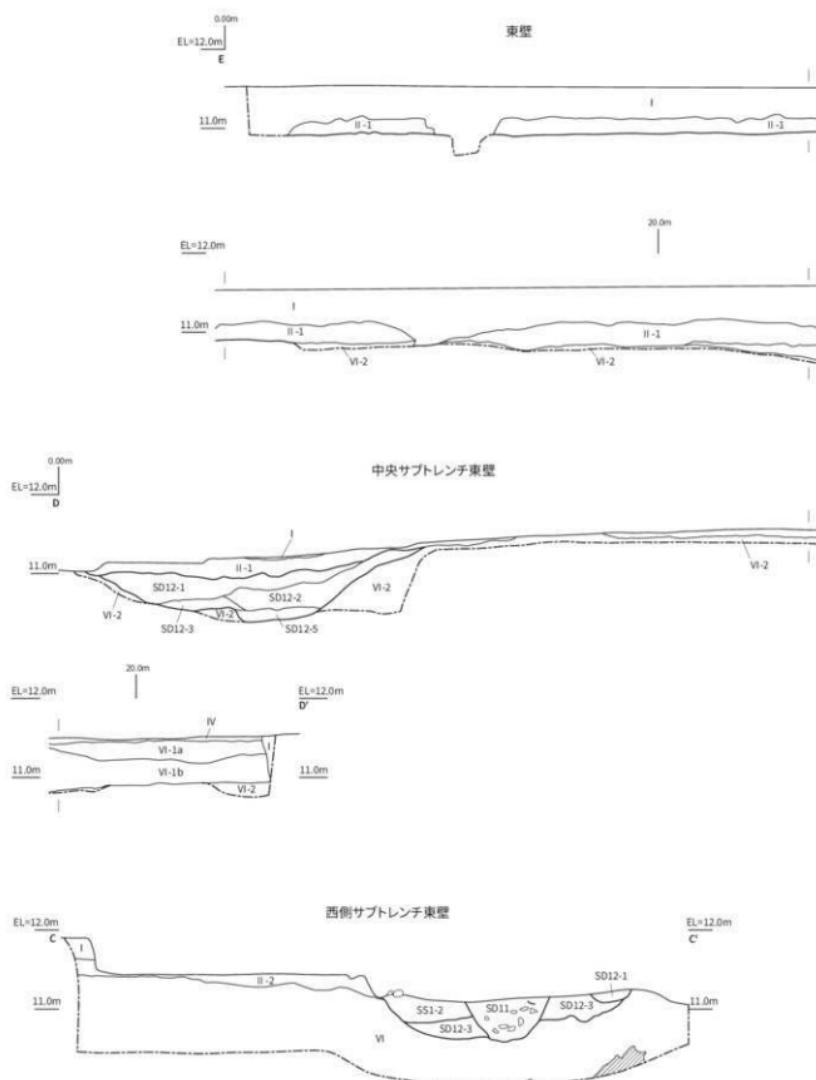


第7図 調査区設定図

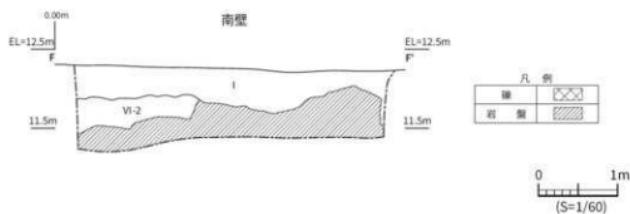
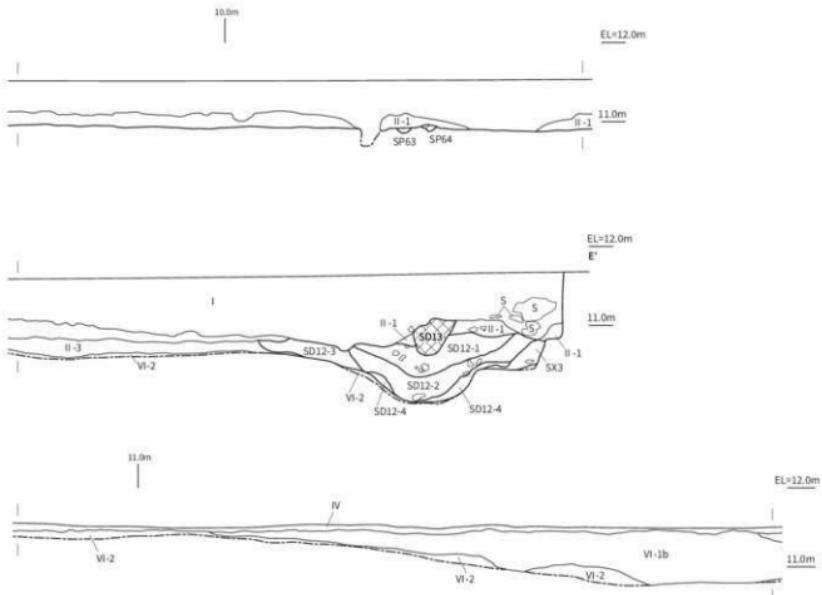


第8図 土層断面図1





第9図 土層断面図2



調査区東壁分層 西から



中央サブトレンチ東壁分層 南西から

### 第3節 遺構と遺物

本節ではまず遺構について報告し、次に遺物について報告する。なお、遺構は時代別、遺物は遺構・層序別に報告を行う。

#### 1 遺構

令和3年度の調査では、平成30年度調査区の北側及び西側隣接部に調査区を設定し、遺構の確認を行った。調査の結果、石組遺構（石組1・2）、石列（SS1）、溝状遺構（SD1・2・6・7・11・12・13）、不明遺構（SX3）、ピット（SP63～116）を確認した。

ここでは時代別で各遺構の概要を記述し、統いて遺構図、一覧表の順に報告を行う。なお、遺構番号については、平成30年度調査時に確認された遺構と同一の場合には同じ遺構番号をそのまま使用し、新しく確認した遺構については平成30年度より番号を引き継いで付けた。

#### 近世～近代の遺構

近世～近代の遺構として石組遺構（石組1・2）、石列（SS1）、溝状遺構（SD1・2・6・7・11・12・13）、不明遺構（SX3）、ピット（SP63～74）が確認できた。

#### 石組1

調査区の北東側で確認した20cm大の礎とモルタルを使用して作られた遺構で、北東側はスロープ状に、他方はほぼ垂直に地山を掘り込んで作られている。北東側には足場と思われる平たく成形されたモルタルがあり、対面の南西側には北東方向に面を持つモルタルで作られた構造物が設置される。構造物には縦方向に直径4cmほどの穴が空いており、穴は遺構下の地山面まで続くが用途は不明である。床面には平らに成形されたモルタルと丸みを帯びたモルタルが敷かれる。

遺構内には基本層序の1層が堆積していたため、設置・使用時期が戦後の可能性もあるが、調査区周辺は戦前までは耕作地として利用され、戦後すぐに米軍による土地接收・開発を受けている。そのため、この遺構が近代～土地接收直前まで使用された後、米軍による造成で埋まった可能性も考えられる。今回は当該地の土地変遷を踏まえ、近代の遺構として取り扱った。

戦前の鏡水は製糖業が盛んで、サーターヤーが5カ所にあった（鏡水自治区会1983）。現場周辺にはそのうちの1カ所である水溜屋又砂糖屋（ミンタマヤースサーター・ヤー）があったとされていることから、それに関連する遺構の可能性もあるが、戦後の土地変更が激しく、遺構

の情報が少ないため機能していた詳細な時期・用途は不明である。

#### 石組2

調査区北東側で石組1と隣り合う形で確認した遺構である。基本的な造りは石組1と同じで、遺構の北東側はスロープ状に、他方はほぼ垂直に地山を掘り込んで作られている。北東側には足場と思われる比較的の平らに成形されたモルタルが設置される。石組1の足場がモルタルのみで作られていたのに対し、石組2の足場は拳大の石灰岩を積んだ上からモルタルによって固められ、その表面には溝状の線が数本引かれる。床面は拳大の石灰岩をまばらに配置した後モルタルによって固められている。

今回は当該地の土地変遷を踏まえ、近代の遺構として取り扱った。検出状況は石組1と同じため一連のものと考えられるが、こちらも遺構の情報が少ないと機能していた詳細な時期・用途は不明である。

#### SS1

調査区の北西側で確認した石列で、地山を溝状に掘り込んだ後、拳大～50cm大の石灰岩を南西～北東方向に向けて配置する。南西側はSD12にぶつかる。SS1を境に調査区の北西側ではII-2層が堆積し南東側ではII-1層が堆積することから、土留めもしくは土地区画としての機能があったと考えられる。

#### SD1

調査区の南側で確認した溝状遺構で、平成30年度調査時に検出したSD1の西側延長部分である。地山を掘り込んで作られており、南西～北東方向に延びる。遺構内には3cm～拳大の礎が密に入っており、一部底面で琉球石灰岩の岩盤が確認できる。底面の岩盤は溝の形に沿うように検出されたことから、おそらく人為的に加工し使用していたと考えられる。遺構の深さも1m以上と比較的深いことから、用途がSD2・6・7で想定される耕作地の区画溝とは異なる可能性が考えられる。

戦前の航空写真では同じ方向に道が走っていることから、道に関連する遺構の可能性も考えられる。

#### SD2

調査区の南側で確認した溝状遺構で、平成30年度調査時に検出したSD2の西側延長部分である。地山を掘り込んで作られており、SD1と同じく南西～北東方向に延びる。SD1の南隣にあるが、SD1でみられる3cm～拳大の礎が入っている様子は確認できなかった。深さなどから耕作地の区画溝と考えられる。

**SD 6**

調査区の南側で確認した溝状遺構で、平成30年度調査時に検出したSD 6の西側延長部分である。地山を掘り込んで作られており、西→東方向に延びる。戦前の航空写真から耕作地の区画溝と考えられる。

**SD 7**

調査区の南側で確認した溝状遺構で、平成30年度調査時に検出したSD 7の西側延長部分である。地山を掘り込んで作られており、南東→北西方向に延びる。戦前の航空写真から耕作地の区画溝と考えられる。

**SD11**

調査区の北西側で確認した溝状遺構で、SD12内を掘り込んで作られている。調査区西壁で確認できたSD12内の礫が密に入る部分と一連のものだが、平面で確認できた範囲には壁面ほど礫は入っていないかった。遺構内からロープやガラス片等が確認できたため、戦中～戦後に作られた可能性もあるが、遺構が溝状であること、遺構直上にはI層が堆積していたことから、紛れ込みの可能性を考え、今回は近代の遺構として取り扱った。

**SD12**

調査区の北西→南東方向に延びる、今回の調査で検出した中で最も規模が大きい溝状遺構である。地山を掘り込んで作られており、調査区東壁でも確認できため、調査区外にも延びていると考えられる。SD 1と同じく用途が耕作地の区画溝とは異なる可能性が考えられる。

戦前の航空写真では同地点に北西→南東方向に延びる道が走っており、これは今回検出したSD12の向きと概ね一致する。このことから道に関連する遺構の可能性が考えられる。

**SD13**

調査区の南東で確認した溝状遺構で、SD12内を掘り込んで作られている。2cm一掌大の礫が密に入っており、調査区東壁でも確認できた。遺構内からガラス片等が出土したため、SD11と同じく戦中～戦後に作られた可能性もあるが、遺構が溝状であること、遺構直上にはI層が堆積したことから紛れ込みの可能性を考え、今回は近代の遺構として取り扱った。

**SX 3**

調査区の南東側で確認した遺構で、平成30年度調査時に検出したSX 3の延長部分である。平成30年度では一部コーラル敷きや礫敷きが検出されているが、今回の調査では確認できなかった。SD12にぶつかり、切ら

れる。

戦前の航空写真では同地点で北西方向から延びる道と南西方向から延びる道が合流する様子が確認でき、これはSD12とSX 3の検出状況と概ね一致する。このことからSX 3も道に関連する遺構の可能性が考えられる。

**SP63～74**

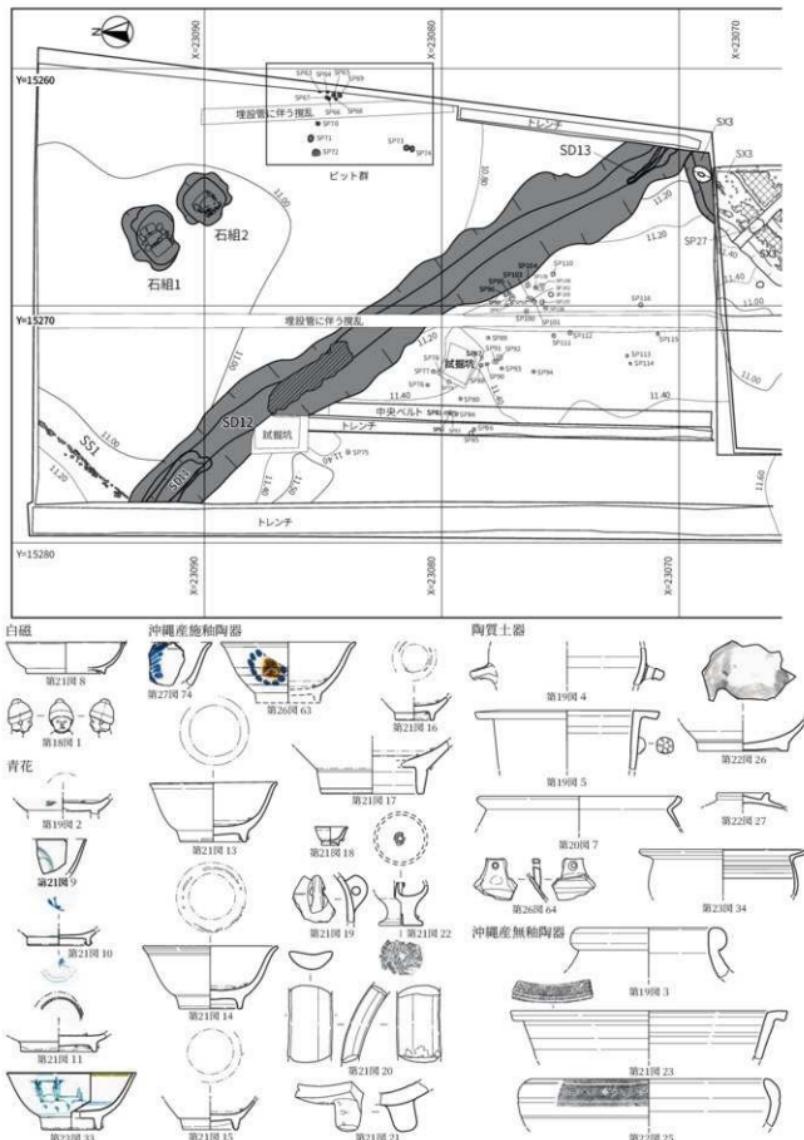
調査区の東側でのみ近世～近代のビットを12基確認できた。東側以外の地点では確認できなかった。ビットはまばらに検出されたため、プラン等は組めなかった。

**縄文時代の遺構**

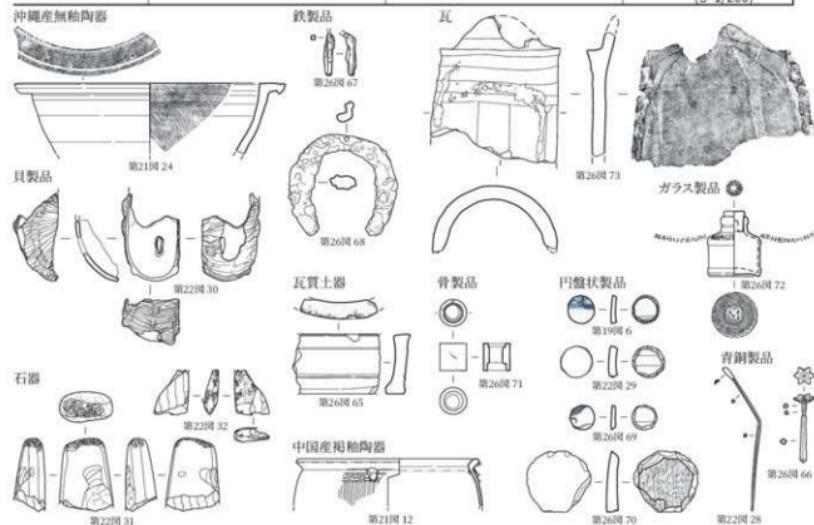
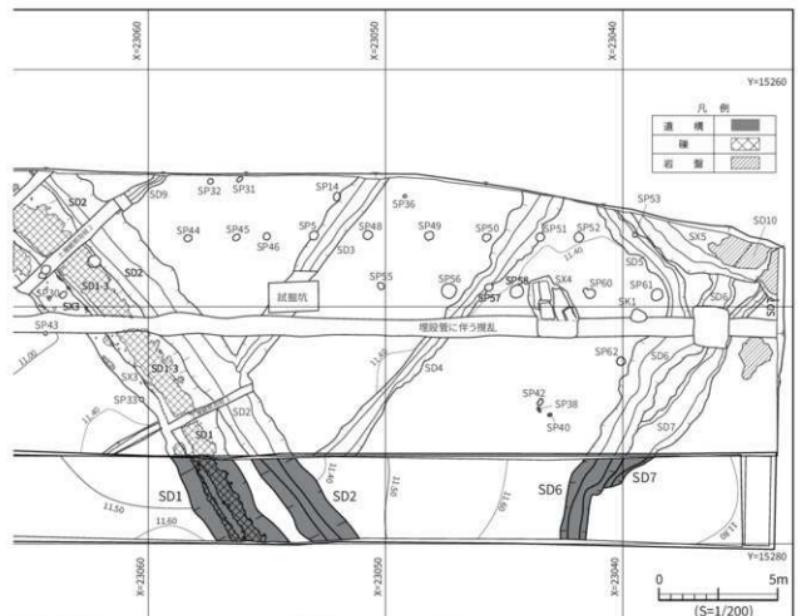
縄文時代の遺構はビット(SP75～116)が確認できた。

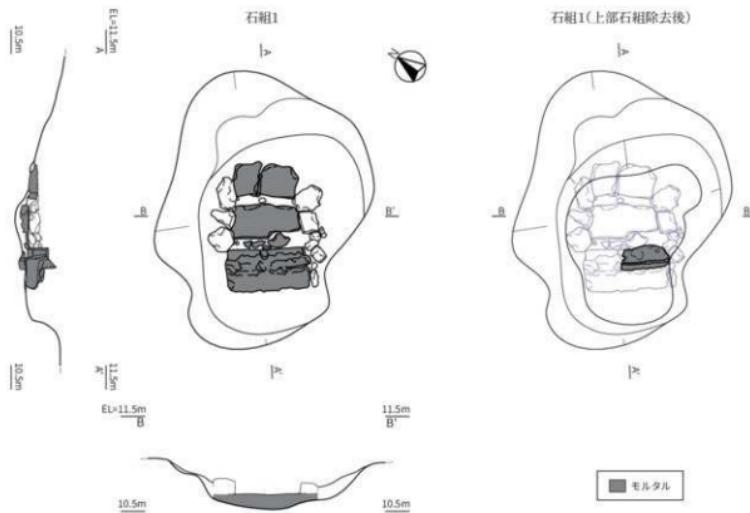
**SP75～116**

調査区中央付近で検出したIV層の下からビットを42基確認できたが、プラン等は組めなかった。遺構内から出土した遺物もSP92の土器1点のみである。

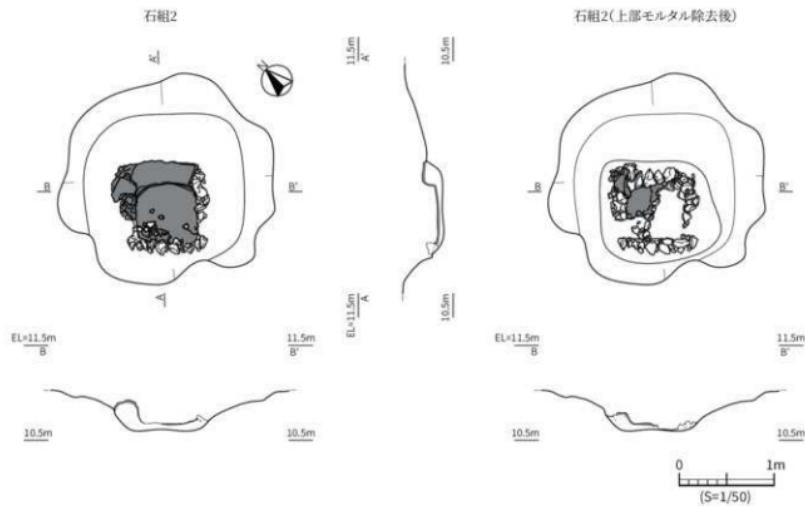


第10図 近世～近代の遺構と出土遺物

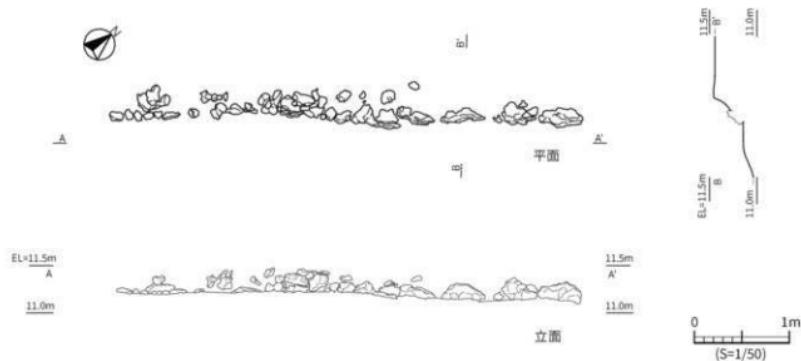




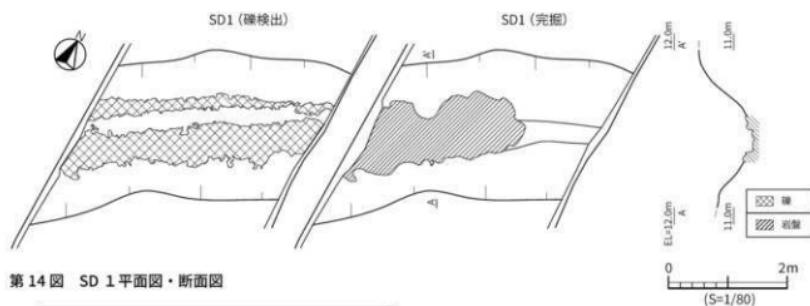
第11図 石組1平面図・断面図



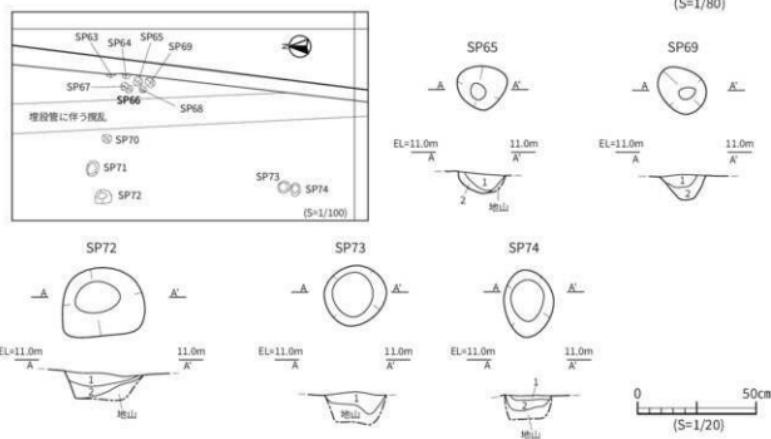
第12図 石組2平面図・断面図



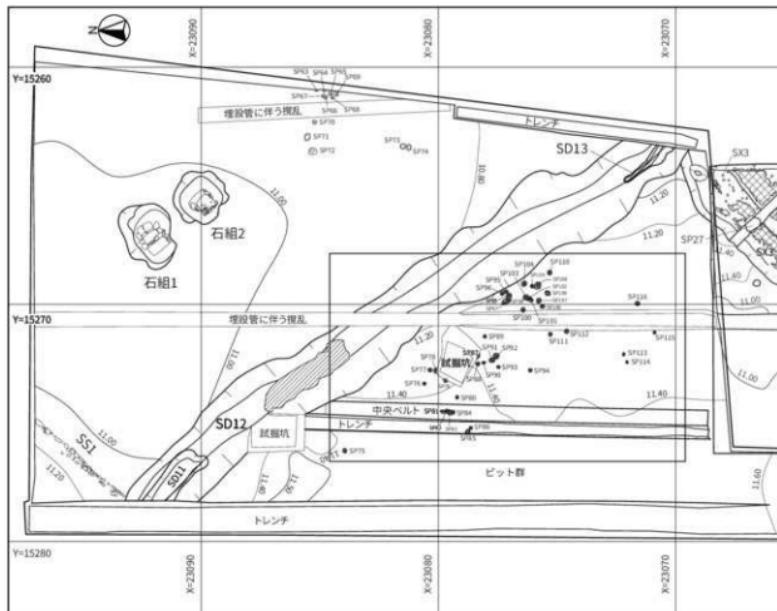
第13図 SS 1平面図・立面図・断面図



第14図 SD 1平面図・断面図

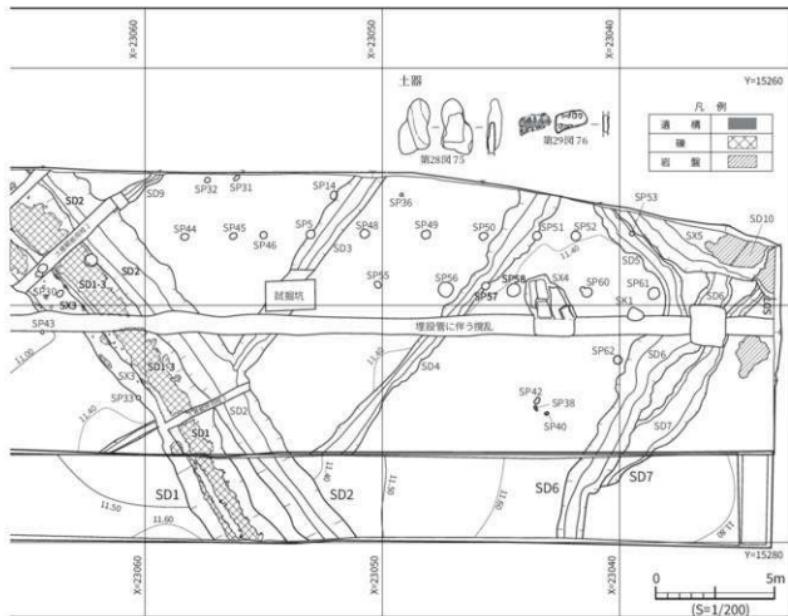


第15図 ピット（近世～近代）平面図・断面図

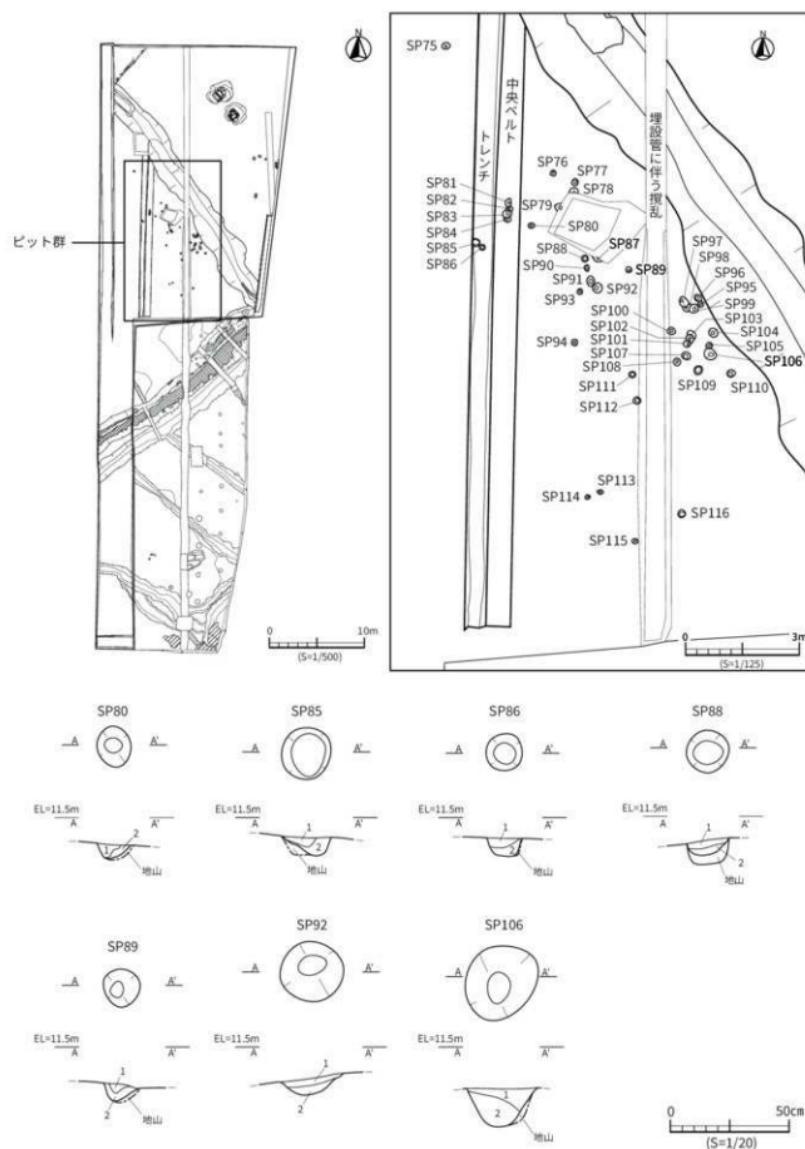


IV層（中央付近の暗褐色土）検出 南から

第16図 繩文時代の遺構と出土遺物



IV層下遺構検出 南東から



第17図 ピット（縄文時代）平面図・断面図

第1表 遺構一覧1

遺構	時期	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	遺構所見等
石組1	近代	2.85	2.35	0.46	遺構内には基本層序I層が堆積。遺構下は堆山の赤土。
石組2	近代	2.24	2.04	0.40	遺構内には基本層序I層が堆積。遺構下は堆山の赤土。
SS1	近世～近代	5.00	1.37	0.30	溝状の掘り込みを作り。1：Hue10YR3/4暗褐色、シルト、しまり・粘性共に有り。炭粒、燒土粒、マージブロックが入り、一部白砂が多く入る。2：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまりはやや強い、粘性やや有り。炭粒、燒土粒、白砂があり、3cm丸の礫がまばらに入る。南西側でSD12を切り、SD11に切られる。
SD1	近世～近代	3.77	2.49	1.14	1：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまりはやや強く粘性は無し。炭粒、燒土粒、白砂、1mm大の石灰岩礫が部分的に有り。2：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまりはやや強く粘性は無し。炭粒、燒土粒、白砂が入る。3：Hue10YR3/4暗褐色、シルト、しまりはやや強く粘性はやや有り。約3cm～拳大の石灰岩礫が混入する。4：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまりは強く粘性は無し。炭粒、燒土粒、白砂が少し入る。
SD2	近世～近代	4.30	1.63	0.26	単層。Hue10YR5/6褐色、シルト、しまりはやや強く粘性はやや有り。炭粒、燒土粒が僅かに入る。Hue7.5YR5/8暗褐色の土が粒状に入れる。
SD6	近世～近代	3.44	1.01	0.11	単層。Hue10YR5/6褐色、シルト、しまりはやや強く粘性は無し。燒土粒が僅かに入る。
SD7	近世～近代	1.54	1.32	0.13	単層。Hue10YR5/6褐色、シルト、しまりはやや強く粘性は無し。燒土粒が僅かに入る。
SD11	近代	2.52	1.01	0.37	単層。Hue7.5YR4/3褐色、シルト、しまりはやや強く粘性は有り。炭粒、マージブロックが入る。拳大的礫が部分的に密に衝入する。SD12を切り。
SD12	近世～近代	25.91	2.75	1.21	1：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまり有り、粘性弱い。炭粒、燒土粒、礫があり、多量の白砂が入る。2：Hue10YR3/4暗褐色、シルト、しまりはやや強く、粘性弱い。炭粒、白砂、小礫が入る。3：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまり、粘性共にやや強い。炭粒、燒土粒が僅かに入る。4：Hue10YR5/6黄褐色。シルト、しまり、粘性やや強い。炭粒が僅かに入り、マージブロックが多量に入る。5：Hue10YR4/6褐色、シルト、しまりはやや弱く、粘性強い。炭粒とマージブロックが入る。
SD13	近代	2.36	0.60	0.32	単層。Hue10YR4/4褐色、シルト、しまり弱い、粘性有り。小礫～拳大的礫が部分的に密に入る。SD12を切り。
SP63	近世～近代	0.20	—	0.04	単層。Hue7.5YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり有り、粘性やや有り。Hue7.5YR4/6褐色の土が粒状に入る。
SP64	近世～近代	0.18	—	0.05	1：Hue7.5YR3/3暗褐色、砂質シルト、しまり、粘性共に有り。2：Hue7.5YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり有り、粘性やや有り。Hue7.5YR4/6褐色の土が粒状に入る。
SP65	近世～近代	0.19	0.18	0.08	1：Hue7.5YR3/3暗褐色、砂質シルト、しまり、粘性共に有り。2：Hue7.5YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり有り、粘性やや有り。Hue7.5YR4/6褐色の土が粒状に入る。
SP66	近世～近代	0.16	—	0.05	単層。SP63と同じ埋土。
SP67	近世～近代	0.17	0.14	0.03	単層。SP63と同じ埋土。
SP68	近世～近代	0.14	0.13	0.06	単層。SP63と同じ埋土。
SP69	近世～近代	0.21	0.17	0.12	SP64と同じ埋土。
SP70	近世～近代	0.20	0.18	0.08	単層。SP63と同じ埋土。
SP71	近世～近代	0.32	0.25	0.06	単層。SP63と同じ埋土。
SP72	近世～近代	0.33	0.28	0.11	SP64と同じ埋土。
SP73	近世～近代	0.25	0.24	0.04	単層。SP63と同じ埋土。
SP74	近世～近代	0.28	0.21	0.06	SP64と同じ埋土。
SX3	近世～近代	3.17	—	0.70	単層。Hue7.5YR4/6褐色、シルト、しまり有り、粘性弱い。拳大的礫と炭粒、マージブロックが入る。SD12に切られる。
SP75	闕文	0.20	0.18	0.07	単層。Hue10YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが入る。2～3cm大的礫を1個模出。
SP76	闕文	0.15	0.15	0.03	単層。SP63と同じ埋土。
SP77	闕文	0.18	0.16	0.07	単層。Hue10YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが入る。
SP78	闕文	0.24	—	0.14	単層。Hue10YR4/6褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが多く入る。
SP79	闕文	0.23	—	0.17	単層。SP77と同じ埋土。

第2表 遺構一覧2

遺構	時期	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	遺構所見等
SP80	縄文	0.17	0.14	0.07	1 : Hue10YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが入る。2 : Hue10YR3/4暗褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが多く入る。
SP81	縄文	0.23	0.15	0.04	単層。Hue10YR4/6褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックが入る。SP82を切る。
SP82	縄文	0.17	—	0.05	単層。Hue10YR4/6褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックと確かに炭粒と燒土粒が入る。SP81・83に切られる。
SP83	縄文	0.24	0.20	0.06	単層。SP82と同じ埋土。SP82・84を切る。
SP84	縄文	0.18	—	0.05	単層。Hue10YR4/6褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックと確かに炭粒が入る。SP83に切られる。
SP85	縄文	0.21	0.20	0.06	SP80と同じ埋土。
SP86	縄文	0.15	0.15	0.07	SP80と同じ埋土。
SP87	縄文	0.29	—	0.09	SP81と同じ埋土。
SP88	縄文	0.17	0.17	0.11	SP80と同じ埋土。
SP89	縄文	0.15	0.14	0.08	SP80と同じ埋土。
SP90	縄文	0.17	0.13	0.06	単層。SP81と同じ埋土。
SP91	縄文	0.27	0.20	0.06	SP80と同じ埋土。
SP92	縄文	0.26	0.25	0.06	SP80と同じ埋土。
SP93	縄文	0.15	0.14	0.06	単層。SP81と同じ埋土。
SP94	縄文	0.17	0.16	0.09	単層。SP81と同じ埋土。
SP95	縄文	0.15	0.14	0.06	単層。SP84と同じ埋土。
SP96	縄文	0.21	0.17	0.03	単層。SP84と同じ埋土。
SP97	縄文	0.28	0.18	0.13	単層。SP84と同じ埋土。SP98を切る。
SP98	縄文	0.23	—	0.16	単層。SP84と同じ埋土。SP97・99に切られる。
SP99	縄文	0.24	0.22	0.08	単層。SP84と同じ埋土。SP98を切る。
SP100	縄文	0.20	0.18	0.07	単層。SP78と同じ埋土。
SP101	縄文	0.19	0.17	0.08	単層。SP81と同じ埋土。SP102を切る。
SP102	縄文	0.22	—	0.07	単層。SP81と同じ埋土。SP103を切り、SP101に切られる。
SP103	縄文	0.25	—	0.10	単層。SP81と同じ埋土。SP102に切られる。
SP104	縄文	0.24	0.22	0.11	単層。SP81と同じ埋土。
SP105	縄文	0.17	0.15	0.06	単層。SP77と同じ埋土。
SP106	縄文	0.32	0.29	0.17	SP80と同じ埋土。
SP107	縄文	0.22	0.20	0.08	単層。SP81と同じ埋土。
SP108	縄文	0.19	0.19	0.08	単層。SP81と同じ埋土。
SP109	縄文	0.25	0.21	0.09	単層。SP84と同じ埋土。
SP110	縄文	0.20	0.19	0.10	単層。SP81と同じ埋土。
SP111	縄文	0.17	0.12	0.06	単層。SP81と同じ埋土。
SP112	縄文	0.19	0.19	0.05	単層。Hue10YR4/4褐色、砂質シルト、しまり強く粘性有り。Hue10YR5/8黄褐色のマージブロックと焼土粒が入る。
SP113	縄文	0.16	0.11	0.05	単層。SP81と同じ埋土。
SP114	縄文	0.14	0.11	0.04	単層。SP81と同じ埋土。
SP115	縄文	0.14	0.14	0.05	単層。SP81と同じ埋土。
SP116	縄文	0.20	0.19	0.04	単層。SP81と同じ埋土。

## 2 遺物

令和3年度調査の報告対象となった人工遺物は総計で1,554点得られ、そのうち76点を図化対象とした。種類としては、中国産青磁、中国産白磁、中国産青花、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、ガラス製品、瓦等が出土している。最も出土数が多いのは本土産近代磁器となっており、次いで沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器と続く。

ここでは出土遺物集計表を掲載した後、遺構別、層序別に概要、観察表、実測図の順に報告を行う。写真是本報告書の末尾に掲載した。また、特徴的な遺物を図化対象とし、胸部片や小片といったものは集計のみ行った。

なお、図化した遺物が少ない遺構、層序に関しては、観察表を省略し、概要にて観察事項の記述を行った。

第3表 出土遺物集計表1

種類	器種	遺構・層序 部位・素材	石組 I			SD1	SD11	SD12	SD13	SX3	I層	II - 1 層		II - 2 層		SP92	IV層	合計
			II - 1 層	II - 2 層	SP92													
中国産青磁	碗	口縁部											1					1
		底部					1			1								3
	器種不明	胴部										3						3
	小計		0	0	0	1	0	1	4		1	0	0	0	0	0	7	
中国産白磁	碗	口縁部					1											1
	小碗	口～底部									1							1
		口縁部	1		2						1							4
	皿	口～底部					1						2					1
	小皿	底部										1						2
	小計		0	1	0	4	0	0	2		3	0	0	0	0	0	10	
中国産白磁(色絵)	小碗	胴部	1															1
		口～底部					1											1
	碗	口縁部	1	3		1	6	3	1								15	
		胴部		7			4	5	1								17	
		底部	1	5			9	6	1								22	
	小碗	胴部					1					1					2	
		底部						2	1								3	
	皿	胴部					1				1	1					2	
	小杯	底部							1								1	
	瓶	胴部							1								1	
中国産青花	器種不明	口縁部					1		4								5	
		胴部	1	2					5	4	1						13	
	小計		0	3	0	18	2	1	34	20	5	0	0	0	0	0	83	
中国産珊瑚釉	小碗	底部									1							1
		口縁部								3	1						4	
	壺	胴部			1				1								2	
中国産 褐釉陶器	器種不明	胴部								1							1	
	鉢	口縁部		1													1	
	小計		0	0	0	2	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	8	
タイ産褐釉陶器	器種不明	胴部				1											1	
	人形	—	1							3	1	1					6	
本土産 近代磁器		口～底部								20	1						21	
	碗	口縁部	1	1	1				49	8							60	
		胴部	1						5	3							9	
		底部				1			16	2							19	
	碗の蓋	撮み～底							5	2							7	
	碗の蓋？	底							4								4	
		完形							1								1	
	小碗	口～底部	2				1		22	6							30	
		口縁部						1		2							27	
		胴部			1			9	2		1						14	
	皿	口～底部							3	2							5	
									23	5							28	

第4表 出土遺物集計表2

種類	器種	遺構・層序 部位・素材	石組			I層	II - 1 層		II - 2 層		SP92	IV層	合計
			1	SD1	SD11	SD12	SD13	SX3	I層	層	層		
本土産 近代磁器	皿	口縁部							10	3	1		14
		底部							11	4			15
	小皿	完形							1				1
		口～底部							4				4
	小杯	完形							4	2			6
		口～底部							1	12	4		17
		口縁部							7	1			8
		底部							2	2			4
	瓶	口縁部							1				1
		底部							4	2			6
本土産 近世陶器	壺	口縁部							1				1
		底部							1				1
	鉢	口縁部							1				1
		底部							1				1
	小鉢	口～底部							1				1
		口～底部							4	1			5
	湯呑	口縁部							1	6	3		10
		制部							1				1
		底部							2				2
	花瓶？	口縁部							1				1
		制部							1				1
本土産 急須	急須	口縁部							2				2
		注口							3				3
	急須？	制部							1				1
		完形							1	1			2
	急須の蓋	撇み～底							1				1
		撇み～持							2				2
		底～持							5				5
		底							2				2
	カップ	口縁部							2				2
		制部							1				1
本土産 水滴	水滴	口縁部									1		1
	玩具	完形							1				1
	碍子	—							7				7
	倒入れ	口～底部							1				1
	人形	—							1				1
	灰皿	口～底部							6				6
		口縁部							1				1
	面種不明の蓋	底～持							2	1			3
		口～底部							3	1			4
	器種不明	口縁部							4	2	1		7
本土産陶器		制部							7	2	1		13
		底部							6	3			9
		不明							2				2
	小計		2	4	1	5	3	0	314	67	5	0	401
	碗	口縁部							2				2
	皿	底部							1				1
	小皿	口～底部							2				2
	瓶	口縁部							1				1
		制部							1				1
		底部							1				1
本土産陶器	桶鉢	口縁部							2				2
		制部							1				1
	鉢の蓋	底～持							1				1
	火炉？	口縁部							1				1
	急須	制部							1				1
	急須の蓋	撇み～持							3				3
	湯呑	口～底部							1				1
	器種不明の蓋	底～持							1				1
		底							2				2
	器種不明	口縁部							2	2			4

第5表 出土遺物集計表3

種類	器種	遺構・層序 部位・素材	石組							II - 1 層		II - 2 層		SP92	IV層	合計
			1	SD 1	SD11	SD12	SD13	SX 3	I層	II - 1 層	II - 2 層	SP92	IV層			
本土産陶器	器種不明	底部								1	1				2	
	小計		0	1	0	1	0	0	22	4	0	0	0	0	28	
	碗	口～底部				2			2	2					6	
		口縁部	1			13			9	10	2				35	
		胴部		1	4	2			21	19	2				49	
		底部		3		14			18	18	3				56	
	小碗	底部		1		6			7	12	1				27	
		口縁部				2			3	1					6	
	皿	胴部							1						1	
		底部			1					2					3	
	小杯	口～底部				1			2						3	
		口縁部								1					1	
	瓶	口縁部		1		3			4	5					13	
		胴部							1	1					2	
		底部														
	壺	耳				1									1	
		胴部				1									1	
		底部							1						1	
	鉢	口縁部		2		1	1	1	12	8					25	
		胴部							2	1					3	
		底部			2			2	1						5	
	鍋	耳							2						2	
	鍋？	口縁部				1				1	1				1	
	香炉	口縁部							1						1	
		底部				1									1	
	施釉陶器	火炉	口縁部							1	1				2	
		胴部			1						1				1	
		底部								1	1				2	
	火入れ	口縁部									1				1	
	鍋	口縁部									1				1	
		底部														
	鍋の蓋	底～袴				1					1				1	
		底	1								1				2	
		口縁部				1			3	1					5	
	急須	注口				1									1	
		把手				3			2	1					6	
		耳							1						1	
		胴部	1		1				2						4	
		底部							1	2					4	
	急須の蓋	囁み～袴							1						1	
		底～袴			1				1						2	
		袴							1						1	
		底				1		3	2						6	
	酒器	底部								1					1	
	湯呑	口縁部							1						1	
	灯明皿	口縁部						1							1	
		底部														
	器種不明	胴部	5	3	15		3	21	38	1					86	
		不明								1					1	
	小計		1	16	10	74	1	4	128	134	10	0	0	0	378	
	瓶	口縁部	1								1				2	
		胴部				1			1	1					3	
		底部			5			1							6	
	壺	口縁部	2	1					1						4	
		胴部	2	1	11	1		6	9						30	
	壺か甕	底部	2	3	10				15	9					45	
		2	1		1			1							4	
	鉢	口縁部	2	6	6		1	5	10	1					31	
		胴部		1		1		1	1						4	
		底部			3			3	1						7	

第6表 出土遺物集計表4

種類	器種	遺構・層序 部位・素材	石組			I層	II - 1 層		II - 2 層		SP92	IV層	合計	
			1	SD1	SD11	SD12	SD13	SX3	I層	II - 1 層	II - 2 層			
沖縄產 無釉陶器	擂鉢	口縁部				5	1	4						10
		胴部		4	1	13	1	11	7					37
		底部				3	1	3						7
		底部?						1						1
	水鉢	口縁部				2		1						3
		胴部						2						2
	甕	口縁部				2								2
		底					1		3					4
	水甕	口縁部												1
		底					1							2
陶質土器	急須	口縁部					1							1
		眼み				1								1
	灯明具	底				1			1					2
		底部					1							1
	扇子甕	胴部				1			1					4
		扇子甕の蓋	体~筒		1				1	1	1			1
	袋物	口縁部							1					1
		底								1				1
	器種不明	胴部	5		12		1	15	10					43
		底部						1		1				2
	小計		3	31	7	77	2	5	77	52	3	0	0	257
瓦質土器	皿	底部						1						1
	鉢	口縁部							6	2				8
	鍋	口縁部	2	2	1	1		2	3					11
		把手						1						1
	火鉢	胴部			1									1
		底			1									1
	蓋	掘み~底				1								1
		底~袴						1						1
		掘み						2		1				3
		袴						1	2					3
	急須	注口				1		1						2
		外耳							1					1
瓦質土器	耳	耳						2						2
		胴部	1	1				6						8
	灯明皿	底部			1									1
		口縁部			1									1
	器種不明	胴部	1					15	19	4				50
		部位不明	5		7		0	39	27	5	0	0		98
	小計		0	10	3	13	1	0						
土器	植木鉢?	口縁部			1									1
		底								1				1
		七輪								1				1
		七輪窓蓋	—							1				1
	七輪落とし蓋	—							1					1
		胴部							2					2
	器種不明	部位不明				2								2
		小計	0	1	0	2	0	0	3	2	0	0	0	8
	器種不明	口縁部						1			1	3	4	
		胴部										31	32	
		底部						1					1	
円盤状製品	小計		0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	34	37
ガラス製品	—	青花		1	1			1	2	2				7
	—	沖縄產施釉陶器		1			1		1	1				3
	—	沖縄產無釉陶器			6			5	3					14
	—	真	1	6			2							9
	小計		0	2	0	14	0	0	9	5	3	0	0	33
	醤油瓶	口縁部							1					1
ガラス製品	食品瓶	完形						1						1
	調味料瓶	口縁部						1						1
	薬瓶	完形						3						3
	化粧瓶	完形						6						6
		底部						1						1

第7表 出土遺物集計表5

種類	器種	遺構・層序 部位・素材	石組							II - 1 層		II - 2 層		SP92	IV層	合計
			1	SD1	SD11	SD12	SD13	SX3	I層	II - 1 層	II - 2 層	SP92	IV層			
ガラス製品	化粧瓶の蓋	—								1					1	
	インク瓶	完形								1					1	
	消化弾瓶	胴部								1					1	
	ビー玉	完形								1					1	
	ランプ笠	—								5					5	
	小 計		0	0	0	0	0	0	23	2	0	0	0	0	25	
石器	磨製石斧	緑色片岩							1						1	
		緑色千枚岩							1					1	2	
	磨石	緑色片岩?													1	1
	磨石?	緑色片岩?							1					1	2	
	すり石?	ニーピ								1					1	
	小 計		0	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	3	7	
石製品?	不明	—								1					1	
石材	—	千枚岩													2	2
	—	石英													1	1
	—	粘板岩							1						1	
	—	チャート													1	
	小 計		0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	5	
骨製品	筒状製品	完形								1					1	
	歯ブラシ	ブラシ部								1					1	
		柄								3	1				4	
	不明	—								1					1	
	小 計		0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	0	7	
貝製品	貝匙	未製品							1						1	
銭貨	二十銭銀貨	完形								1					1	
	半錢青銅貨	完形								1					1	
	小 計		0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	
明朝系瓦	丸瓦	—			2	1	1	1	11	8					24	
	平瓦	—	5	9	17	5	1	29	12	4					82	
	丸・平不明	—			2	1	1		3	2	1				10	
	小 計		5	13	1	19	6	2	43	22	5	0	0	0	116	
近代大和瓦	軒丸瓦	—								1					1	
板状瓦製品	—	—								2					2	
瓦?	—	—								1					1	
金屬製品	ネジ?	—								1					1	
	器種不明	—								2	1				3	
	小 計		0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	4	
鉄製品	鍛鉄	—								1					1	
	角釘	—								1					1	
	器種不明	—	1	1						8					10	
	小 計		1	1	0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	12	
青銅製品	簪	完形			2				1	1					4	
		竿								1					1	
	器種不明	—								4					4	
	小 計		0	0	0	2	0	0	5	2	0	0	0	0	9	
プラスチック 製品	歯ブラシ	完形								2					2	
		柄								1					1	
	器種不明	—								1					1	
	小 計		0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	4	
	合 計		13	85	22	237	15	13	729	362	37	1	40		1554	

**石組1**

石組1からは外国産? 磁器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、鉄製品、瓦が得られ、総数13点であった。その中から特徴的な1点のみ図化を行った。

第18図1は磁器人形の頭部で、縦3.6cm、横2.5cm、重量6.6gである。前後型合わせて製作されており、側面にはバリやバリを削った跡がみられる。中は空洞になっている。釉薬は施されていない。外国産と思われる。

**SD1**

SD1からは中国産白磁、中国産青花、瓦質土器、陶質土器、本土産陶器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、石材、円盤状製品、鉄製品、瓦が得られ、総数85点であった。その中から5点の図化を行った。

第19図2は中国産青花の碗底部である。素地は灰白色で、両面に明緑灰色を呈する釉が施釉され、内底は蛇目釉剥ぎされる。景德鎮窯産である。

第19図3は沖縄産無釉陶器の壺口縁部である。外面は赤灰色、内面は褐灰色を呈する。口縁部は外側に折り曲げられ玉環状に肥厚する。

第19図4は陶質土器の火が胴部で胎土は橙色を呈し、雲母と白色粒と赤色粒を含む。横耳が付く。

第19図5は瓦質土器の植木鉢口縁部で、外面は明褐色、内面は灰色を呈する。口縁部は逆L字状で胴部に花文が貼り付けられる。

第19図6は中国産青花の胴部を利用した円盤状製品で、両面に剥離加工が施される。重量5.9g。

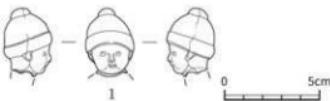
**SD11**

SD11からは陶質土器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦が得られ、総数22点であった。その中から1点のみ図化を行った。

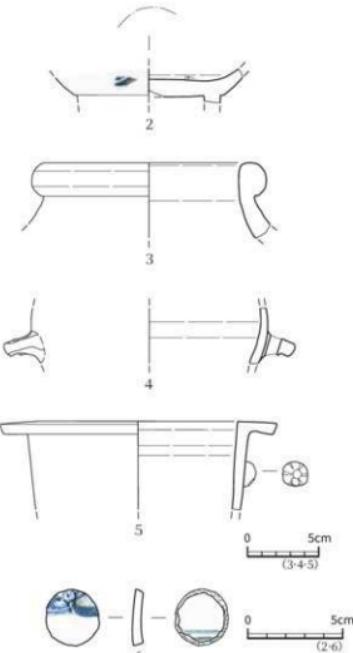
第20図7は陶質土器の鍋口縁部で、素地、内外面共に橙色を呈し、雲母、赤色粒、僅かに白色粒を含む。頸部は「く」の字状に曲がる。

**SD12**

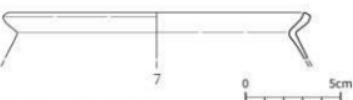
SD12からは中国産白磁、中国産青花、中国産青花、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、石器、貝製品、円盤状製品、瓦等が得られ、総数237点であった。今回検出した遺構の中で、最も多く遺物が出土している。その中から25点の図化を行った。図化を行った遺物の詳細は観察表(第8表)に記載する。



第18図 石組1出土遺物



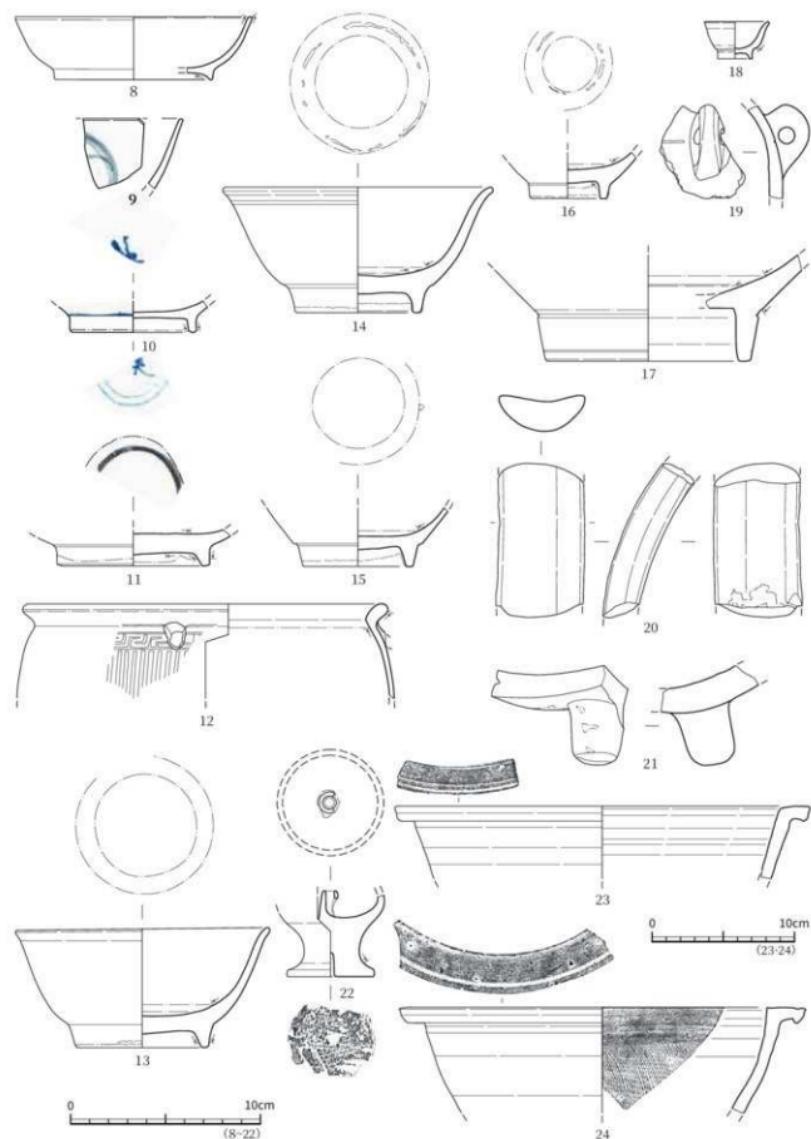
第19図 SD1出土遺物



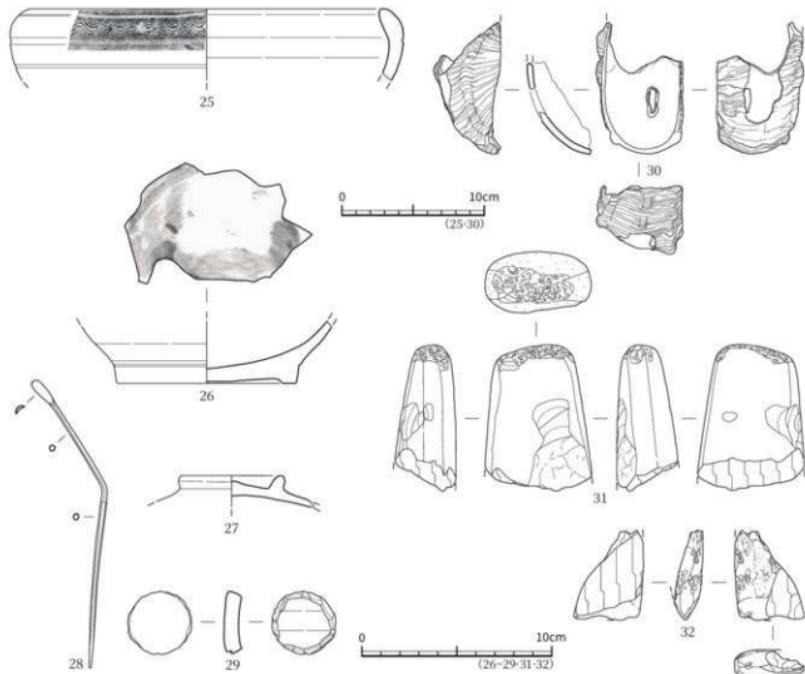
第20図 SD11出土遺物

第8表 SD12 出土遺物観察一覧

番号	種類	器形	部位	法量(単位:cm)(1)復元			観察事項
				口径	底径	器高	
8	中国産白磁	瓶	口～底部	(12.4)	(8.3)	3.3	直口口縁。素地は白色を呈する。透明釉を内底から高台内面まで施釉後、口唇部を釉剥ぎ。
9	中国産青花	碗	口縁部	—	—	—	直口口縁。素地は白色を呈する。外縁に丸文か。景德鎮窯產。
10	中国産青花	碗	底部	—	(6.4)	—	素地は白色を呈する。釉を表面に施釉後、費付を釉剥ぎ。景德鎮窯產。
11	中国産青花	瓶	底部	—	(8.0)	—	素地は灰白色を呈する。釉を表面に施釉後、内底と費付を釉剥ぎ。内底は蛇目釉剥ぎか。細かい買入あり。景德鎮窯產。
12	中国産施釉陶器	鉢	口縁部	(19.2)	—	—	素地は淡黄褐色を呈する。外縁は施釉を施す。口縁部内面から口唇部までは露胎。外縁に露胎と麗沈縫が入る。底部に耳が付く。
13	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	(13.4)	7.0	6.3	素地は灰白色を呈する。内面に白化粧と透明釉を施釉後、内底と費付を釉剥ぎ。内底は蛇目釉剥ぎ。全体に細かい買入あり。
14	沖縄産施釉陶器	碗	口～底部	(14.2)	6.6	7.1	素地は橙色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施釉後、内底と費付を釉剥ぎ。内底は蛇目釉剥ぎ。全体に細かい買入あり。
15	沖縄産施釉陶器	碗	底部	—	5.8	—	素地は灰白色を呈する。内面に白化粧と灰釉。外縁に暗褐色を呈する釉を施釉後、内底と費付を釉剥ぎ。費付に白土唐墨、内底に買入あり。
16	沖縄産施釉陶器	小鉢	底部	—	3.9	—	素地は浅黄色を呈する。内面に白化粧と灰釉。外縁に黒色を呈する釉を施釉後、内底と費付を釉剥ぎ。外底は一部露胎。内底は蛇目釉剥ぎ。費付に白土唐墨。
17	沖縄産施釉陶器	鉢	底部	—	(10.8)	—	素地は黄褐色を呈する。内面に白化粧と透明釉。外縁は施釉を施釉後、内底を蛇目釉剥ぎ。高台外縁から外底まで露胎。
18	沖縄産施釉陶器	小杯	完形	3.3	1.8	1.95	素地は灰白色を呈する。内底から外底腰部に灰釉を施釉。全体に買入あり。重量11.4g。
19	沖縄産施釉陶器	壺	耳	—	—	—	素地は灰白色を呈する。内面は黒褐色を呈する釉。外縁は施釉を施す。
20	沖縄産施釉陶器	急須	把手	—	—	—	按瓶(アンビン)の把手。素地は灰白色を呈する。両面ともに黒色を呈する釉を施釉。一部に石斑が付着する。
21	沖縄産施釉陶器	香炉	底部	—	—	—	素地は白い黃褐色を呈する。高台外縁までは黄褐色を呈する釉が施釉され、高台内面から外底、内底は露胎。内底の織縫痕が明瞭。
22	沖縄産施釉陶器	灯明皿	底部	—	4.6	—	素地は浅黄褐色を呈する。外底を除いた全体に黒褐色を呈する釉を施釉。外底は平たく、織縫痕が明瞭。
23	沖縄産無釉陶器	鉢	口縁部	(29.2)	—	—	素地。内外面共に橙色を呈する。口縁部は逆L字状で口唇部に2条の縫隙を施す。内面の織縫痕が明瞭。
24	沖縄産無釉陶器	擂鉢	口縁部	(28.6)	—	—	素地は橙色。内面には白い褐褐色、外縁は橙色を呈する。口縁部は逆L字状で口唇部に1条の縫隙を施す。内面に横目を密に施す。
25	沖縄産無釉陶器	水鉢	口縁部	(24.8)	—	—	素地は赤褐色。内面には白い赤褐色を呈す。口縁部は内溝し、口唇部は舌状を呈する。口縁部外縁に1条の縫隙をめぐらし、その下に波状文を施す。内外面共に織縫痕が明瞭に残る。
26	陶質土器	火鉢	底部	—	(9.4)	—	素地。内外面共に橙色を呈する。黒母、白色粒、赤色粒を含む。内面に煤が付着する。
27	陶質土器	蓋	鍋み～底	—	—	—	素地。内外面共に白い赤褐色を呈する。黒母、白色粒、赤色粒を含む。高台状の鍋みを持つ。全体的に摩耗しており、調整は不明瞭。
28	青銅製品	簪	完形	カブ長 1.6	頭長 7.0	竿長 8.8	耳接き状を呈する。断面はカブが三日月状、頭が円状、竿は六角形状。重量5.5g。
29	円錐状製品	—	—	叢 3.3	横 3.3	厚さ 0.8	沖縄産無釉陶器の脇部を利用。外縁からの削離加工。重量12.3g。
30	貝製品	貝殻	未製品	—	—	—	綠辺部の一部に研磨が施される。外縁は未加工で一部擦痕が剥がれ真珠層が露出している。
31	石器	磨製石斧	—	—	—	—	緑色片岩製。刃部は欠損している。基部は研磨と一部敲打による成形が施される。基部中央あたり削離による調整か。
32	石器	磨製石斧	—	—	—	—	緑色手取岩製。基部と刃部がほぼ欠損しているが、残存部分は全面研磨が施されている。



第21図 SD12 出土遺物 1



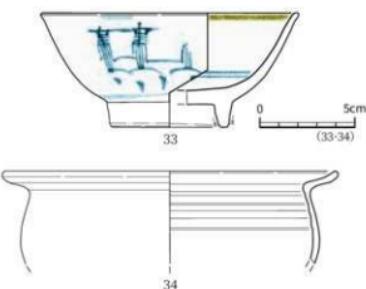
第22図 SD12出土遺物 2

## SD13

SD13からは中国産青花、陶質土器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、瓦が得られ、総数15点であった。その中から2点のみ図化を行った。

第23図33は中国産青花の鍋口縁部～底部である。素地は灰白色で、明緑色を呈する釉を施釉後、墨付を釉剥ぎされる。口縁部内面に1条と胴部内面に2条の圈線、外面に寿文と連弁文が描かれる。福建・広東系。

第23図34は陶質土器の鍋口縁部である。素地、内外面共に橙色を呈し、雲母、赤色粒を含む。頸部は「く」の字状に曲がる。内面の輪郭痕が明瞭に残る。



第23図 SD13出土遺物

## Ⅰ層

I層からは中国産青磁、中国産白磁、中国産青花、中國産褐釉陶器、陶質土器、本土産陶器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、錢貨、瓦等が得られ、

総数729点であった。その中から28点の國化を行った。國化を行った遺物の詳細は観察表（第9、10表）に記載する。

第9表 I層出土遺物観察一覧表

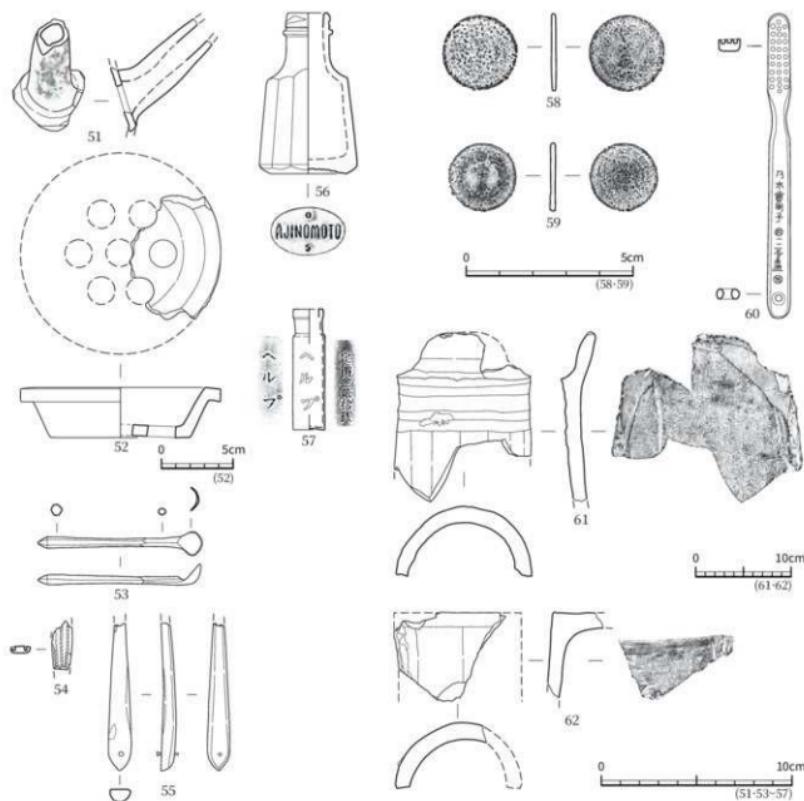
番号	種類	器形	部位	法量(単位:cm)(注)は復元			観察事項
				口径	底径	高さ	
35	中国産青花	碗	口縁部	(9.2)	—	—	素地は灰白色を呈する。両面に明瞭灰白色を呈する輪を施釉する。外面に牡丹唐草文、内面に花唐草文が描かれる。景徳鎮窯底。
36	本土産近代磁器	碗	口～底部	(15.0)	(5.6)	6.9	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉後、費付を釉割ぎ。内面に赤、緑で團線と菊唐草文、外面に赤、緑で團線と雷文と牡丹唐草文、背で「ぼ」の字が描かれる。第24団37と同一個体。
37	本土産近代磁器	碗	口～底部	(15.0)	—	—	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉する。内面に赤で團線、外面上に赤、緑で團線と雷文と牡丹唐草文、背で「ゆ」の字が描かれる。第24団36と同一個体。
38	本土産近代磁器	碗	口～底部	(13.9)	5.2	5.7	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉する。内面に赤で團線、外面上に松竹梅の文様帶、内底に複花文が描かれる。目跡が5個残る。底部産。
39	本土産近代磁器	碗	口～底部	(11.2)	(4.0)	4.8	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉後、費付を釉割ぎ。口縁部外面に2条の團線が描かれる。外底に「岩」のロゴマークと「山形屋」の文字あり。
40	本土産近代磁器	皿	口～底部	(11.3)	(6.2)	2.25	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉後、費付を釉割ぎ。釉は所々白濁する。内面に灰文と雷文。口縁部に口絞。瀬戸・美濃系。
41	本土産近代磁器	小皿	口～底部	(9.6)	(5.6)	2.0	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉後、費付を釉割ぎ。口縁部外面に2条の團線が描かれる。
42	本土産近代磁器	小杯	口～底部	(5.3)	2.8	3.45	素地は灰白色を呈する。両面に透明釉を施釉後、費付を釉割ぎ。外底に「岐191」の機刷番号あり。
43	本土産近代磁器	玩具	完形	上面幅 4.0	3.5	3.3	素地は灰白色を呈する。外面に暗赤褐色を呈する輪を施釉する。費付から外底と内面は露胎。上面は保たれており、0.2～0.3cm程の穴が5個開く。側面は1カ所のみ縫合1.3cm幅1.2cmの穴が開いている。ミニチュアの香がわ。重量34.2g。
44	沖縄産施釉陶器	碗	底部	—	(6.8)	—	素地は淡黄褐色を呈する。腰部内側から外側にかけて灰釉を施釉か。内面に難燃痕が残る。
45	沖縄産施釉陶器	鉢	口縁部	(27.6)	—	—	素地は淡黄褐色を呈する。内面に難燃痕が残る。
46	沖縄産施釉陶器	瓶	底部	—	6.2	—	素地はよい橙色を呈する。内面は露胎、外面上は白化粧と須頭釉を施釉後、費付を釉割ぎ。内面の難燃痕が明瞭に残る。
47	沖縄産施釉陶器	小杯	口～底部	(4.3)	2.3	2.95	素地は灰黃褐色を呈する。全面に白化粧と透明釉を施釉後、費付の白化粧と釉を剥ぐ。外底は白化粧を厚めに浮き出している。口縁部は透明釉の上からオリーブ黄色を呈する釉を掛け分ける。
48	沖縄産施釉陶器	急須	口縁部	(9.8)	—	—	素地は灰黃褐色を呈する。外面上に黒色を呈する輪を施釉する。口縁部内面から口縁部は釉割ぎ。
49	陶質土器	蓋	—	—	—	—	素地、内外面共に褐色を呈する。蓋母、白色絵、赤色絵を含む。
50	陶質土器	蓋	—	—	—	—	素地、内外面共に褐色を呈する。蓋母、白色絵を含む。難燃痕が残る。
51	陶質土器	急須	注口	—	—	—	素地、内外面共に褐色を呈する。蓋母、白色絵を含む。内面の難燃痕が明瞭に残る。注口は内側に貼付する。
52	瓦質土器	七輪 落とし蓋	—	—	—	—	素地は褐色を呈する。蓋母、石英、白色絵、赤色絵を含む。上面には白土が墨書きされ、約2cm大的穴が少なくとも4個開いている。
53	青銅製品	簪	完形	カブ長 1.3	頸長 1.8	5.2	竿長 8cmを呈する。断面はカブが三日月状。頭が扁平六角形状。竿は六角形状。 重量10.2g。
54	骨製品	歯ブラシ	ブラシ部	—	—	—	残存部分は3条27穴の桶毛穴。全体的に研磨が施される。
55	骨製品	歯ブラシ	柄	—	—	—	全体的に研磨が施される。一部光沢をもつ。柄下部に釘が刺入する。
56	ガラス製品	瓶	完形	2.1	3.9	8.45	調味料瓶。色調は褐色。津村敬天堂製の背銀葉。胴部に「ヘルプ」「定價金百拾錢」のエンボス有り。昭和3(1928)年から昭和26(1951)年まで製造。側面の合わせ目が明瞭に残る。 重量84.6g。
57	ガラス製品	瓶	完形	1.55	1.7	6.3	薬瓶。色調は褐色。津村敬天堂製の背銀葉。胴部に「ヘルプ」「定價金百拾錢」のエンボス有り。気泡が入る。側面の合わせ目が明瞭に残る。重量14.3g。

第10表 I層出土遺物観察一覧2

番号	種類	器形	部位	法量(単位:cm)( )は復元			観察事項
				口径	底径	高さ	
58	銭貨	半錢 青銅質	完形	—	—	—	表面に龜の図柄。裏面に「半錢」の文字が僅かにみえる。明治13年。重量3.4g。
59	銭貨	二十銭 銀質	完形	—	—	—	表面に「二十銭」の文字。裏面に旭日の図柄有り。明治41年。重量4.0g。
60	プラスチック 製品	歯ブラシ	完形	—	—	—	ブラシ部に3条29穴の植毛穴。植毛穴内には綿に糸のようなもののがみえる。柄に「今木 歯刷子 公一二可品 12年」と刻まれる。重量10.7g。
61	明朝系瓦	丸瓦	—	—	—	—	玉縁部と両部の境には横位にナデがみられ。筒部には綾紋のナデが深く入る。玉縁部の 裏側は面取りが行われ。凹部全体に布目痕が残る。凸部に僅かに漆喰が付着する。
62	近代大和瓦	軒丸瓦	—	—	—	—	瓦当部は無文。瓦当部の裏面と上面にナデ痕がある。明朝系瓦技術で作られた近代大和瓦。



第24図 I層出土遺物1



第25図 I層出土遺物2

## II-1層

II-1層からは中国産青磁、中国産白磁、中国産青花、陶質土器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、骨製品、青銅製品、瓦等が得られ、総数362

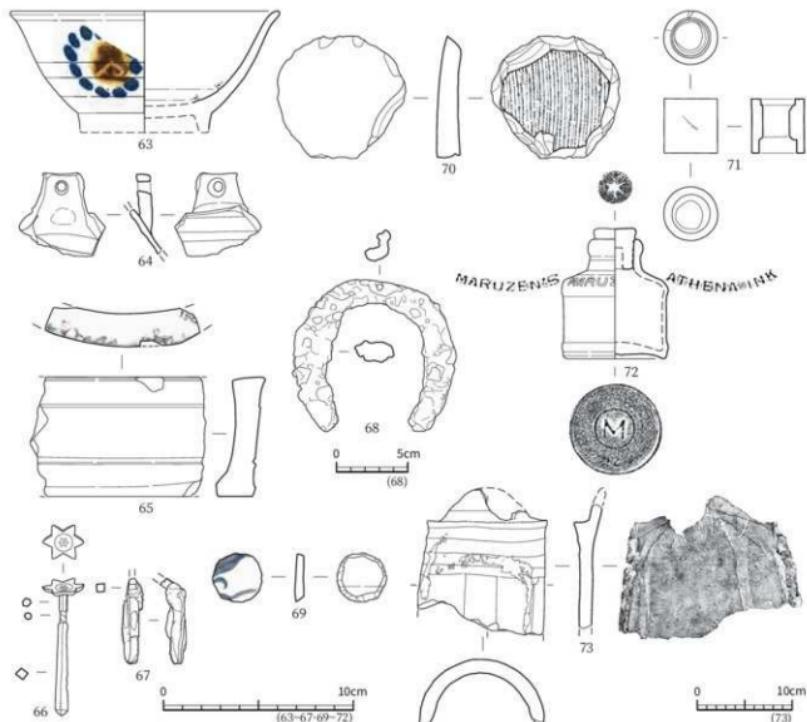
点であった。その中からII点の図化を行った。図化を行った遺物の詳細は観察表(第11、12表)に記載する。

第11表 II-1層出土遺物観察一覧1

番号	種類	器形	部位	法量(単位:cm))は復元			観察事項
				口径	底径	高さ	
63	沖縄産施釉陶器	碗	口縁部	(34.2)	—	—	素地は黄灰色を呈する。両面に白化粧と透明釉を施釉後、内底を蛇目軸削ぎ。外面に印花文が描かれる。
64	陶質土器	急須	外耳	—	—	—	素地。内外面共に褐色を呈する。裏母と赤色粒を含む。胴部に耳を貼付ける。内面の輪縁痕が明瞭に残る。
65	瓦質土器	七輪窓蓋	—	—	—	—	七輪の窓部分の蓋。素地。内外面共に褐色を呈する。裏母と赤色粒を含む。内面には薄く白土が塗布される。下面は使用により若干摩耗している。上面には煤が付着する。

第12表 II-1層出土遺物観察一覧2

番号	種類	器形	部位	法量(単位:cm))は復元			観察事項
				口径	底径	器高	
66	青銅製品	簪	完形	頭長 0.9	ムディ長 8.6	竿長 0.8	カブ高22.1mm。六弁花形カブは頭、頭、底を別造焼付後、竿を糊付。断面は頭が六角形状。竿は方形状を呈す。
67	鉄製品	角釘	—	—	—	—	鋲による腐食が激しく詳細な形状は不明。
68	鉄製品	蹄鉄	—	—	—	—	釘穴が左右に3つずつの計6つある。鋲による腐食が激しく、釘穴を肉眼で確認するのは困難。
69	円盤状製品	—	—	縦 2.5	横 2.6	厚さ 0.4	中國產青花の胴部を利用。両面を剥離加工。重量4.2g。
70	円盤状製品	—	—	縦 6.45	横 6.75	厚さ 0.75	沖縄產無釉陶器の擦跡胴部を利用。両面を剥離加工。重量57.1g。
71	骨製品	筒状製品	完形	縦 2.9	横 2.8	厚さ 0.8	哺乳類骨の骨幹を切断した製品。全面に丁寧な研磨が施され、光沢をもつ。重量18.7g。
72	ガラス製品	瓶	完形	2.4	5.1	6.9	色調は透明。肩部に「MARUZEN'S ATHENA INK」、底面に「88」のエンボスあり。側面の合わせ目が明瞭に残る。コルク栓が残る。重量97.0g。
73	明朝系瓦	丸瓦	—	—	—	—	玉緑部と筒部の境には横位にナデがみられ、筒部には縦位のナデが浅く入る。玉緑部の裏側は面取りが行われ、凹部全体に布目痕が残る。凸部に墨塗が付着する。



第26図 II-1層出土遺物

## II - 2層

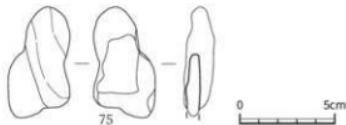
II - 2層からは中国産青花、陶質土器、本土産近代磁器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、円盤状製品、瓦等が得られ、総数37点であった。その中から1点のみ図化を行った。

第27図74は沖縄産施釉陶器の碗口縁部で素地は黄橙色を呈する。両面に白化粧と透明釉が施釉され、外面には呉須による絵付けが施される。全体的に貫入が入る。

## SP92

今回の調査で検出したビットのうち、SP92のみ遺物が出土している。

第28図75は土器の口縁部である。胎土は橙色で石英、白色粒を多く含む。口縁部に突起状の土を貼付いている。宇座浜式土器と思われる。



第28図 SP92出土遺物

## 第4節 自然遺物

## 1 脊椎動物遺体

今回の発掘調査でえられた脊椎動物遺体については、県埋文センター所蔵の現生標本を参考にして同定作業を行った。加えて丸山真史氏（東海大学）に同定作業中に調査指導をいただいた。

分析資料はすべて発掘現場で取り上げられた資料（ピックアップ資料）である。今回の発掘調査では、魚類、鳥類、哺乳類が確認できた（第13表）。

計測作業は、臼歯、四肢骨等で計測可能なもので行った。計測位置はDriesch1976に従っている。

**魚類** 今回の調査では、サメ類、ハリセンボン科、エフキダイ科の出土があった。

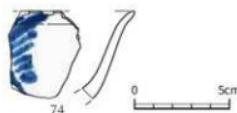
**鳥類** トリ？と思われる資料が出土している。解体痕の可能性があるものがみられる。

**哺乳類** ウマ、ウシ、イノシシ／ブタ、ブタ、ヤギなどがみられる。このなかでも、ブタとしたものはリュウキュウイノシシ（現生標本）に比べ、骨の形態や大きさが若干異なる特徴をもっている状況があり、ブタと同定した。イノシシ／ブタと同定したものも、ブタと同様の出土状況であるため、ブタの可能性が高い。

## IV層

IV層からは土器、石器、石材が得られ、総数40点であった。すべて破片で状態も良くないため、特徴的な1点のみ図化を行った。

第29図76は大山式土器の胴部である。胎土は赤褐色で白色粒を含む。確認できる範囲で横に2条の押捺刻文が施されているが、全体的に摩耗しており残りは悪い。



第27図 II - 2層出土遺物



第29図 IV層出土遺物

第13表 脊椎動物遺体種類一覧

軟骨魚綱	CHONDRICHTHYES
サメ類	Lamniformes
硬骨魚綱	OSTEICHTHYES
エフキダイ科	Lethrinidae
ハリセンボン科	Diodontidae
鳥綱	AVES
トリ？	—
哺乳綱	MAMMALIA
ウマ	Equus feres
ウシ／ウマ	Bos taurus / Equus feres
ブタ	Sus scrofa domesticus
イノシシ／ブタ	Sus scrofa / S. s. domesticus
ヤギ	Capra hircus
ウシ	Bos taurus

第14表 魚類出土状況

I層		部位	左	右	不明	-	計
分類	種						
ハリセンボン科	種	—				11	11
	椎骨	腹椎				1	1
	不明	—				1	1
	未分類					1	1
合計			0	0	0	15	15

## II - 1層

分類	種類	部位	計測	左	右	不明	-	計
サメ類	椎骨	—	椎体幅径32.58mm 椎体厚18.73mm				1	1
エフキダイ科	ハマエフキ 型	前上 頭骨	—	1				1
				1	0	0	1	2

第15表 鳥類・哺乳類出土状況

SD1

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
ヤギ	上腕骨	骨幹部	—	—	—	1				1
不明	不明	破片	—	—	—				1	1
		合計				1	0	0	1	2

SD11

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
イノシシ/ブタ	脛骨	骨幹部・遠位部	未融合(遠位端)	解体痕 螺旋状剥離	SD16.97	1				1

SD12

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
ウシ/ウマ	不明	破片	—	解体痕 打ち削り	—				1	1

I層

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
トリ?	中足骨	近位部-骨幹部	—	解体痕 カットマーク?	—	1				1
ウシ/ウマ	不明	破片	—	—	—				1	1
	椎骨(胸椎)	棘突起	—	—	—				1	1
	肋骨	骨幹部	—	—	—	1				1
イノシシ/ブタ	肩甲骨	骨幹部	—	—	—	1				1
	椎骨	近位端-骨幹部	—	解体痕 螺旋状剥離	—	1				1
イノシシ/ブタ?	大腿骨?	破片	—	—	—				1	1
	頭蓋骨	前頭骨	—	—	—	1				1
ブタ	逆離歯(上顎)	c	—	—	—	1				1
	指骨(中節骨)	完存	—	—	—	1				1
ヤギ	寰骨	寰骨臼-軸骨	—	解体痕 カットマーク、打ち削り	LA30.51 LAR23.26	1				1
ウシ	寰骨	寰骨臼付近	—	—	—	1				1
	脛骨?	骨幹部	—	—	—	2				2
不明	不明	破片	—	解体痕 打ち削り	—				1	1
			—	—	—				4	4
			—	—	—				1	1
		合計				1	7	4	9	23

II - 1層

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
ウマ	肋骨	骨幹部	—	—	—	1				1
イノシシ/ブタ	肋骨	骨幹部	—	—	—	1				1
ブタ	尺骨	近位部-骨幹部	未融合(近位端)	解体痕 カットマーク、叩打	DPA34.97 SDO30.02	1				1
	中手骨(III)	近位端-遠位部	未融合(遠位端)	—	—	1				1
ウシ	逆離歯(上顎)	M <sup>3</sup> /M <sup>2</sup>	—	—	L28.48 B-	1				1
		骨幹部	—	—	—				4	4
不明	不明	破片	—	—	—				4	4
			—	—	—				1	1
			—	—	—				2	2
		合計				2	1	2	11	16

II - 2層

種類	部位	残存状況	成長	加工	計測	左	右	不明	一	計
ウマ	肋骨	骨幹部	—	—	—	1				1
ブタ	蹠骨	近位端-遠位端	—	解体痕 カットマーク	—	1				1
不明	不明	破片	—	—	—				1	1
		合計				0	1	1	1	3

## 2 貝類遺体

今回の発掘調査で得られた貝類遺体については、県埋文センター所蔵の貝類標本を参考にして同定作業を行った。分析資料は全て発掘現場で取り上げられた資料(ピックアップ資料)である。同定資料に関しては、同定標本数(NISP)で示し、完形及び殻長の数から個体数を算出している。

今回の調査では、貝類遺体15科36種が確認できた。得られた貝類の生息地類型は第16表に示す。

陸産貝であるオナジマイマイ科パンダナマイマイ、ナガウニ科パイプウニの資料も得られており、少數であることから別項を設けず、本項で報告する。

第16表 貝類の生息場所類型

大区分	底質等	小区分																						
		I 外洋 - サンゴ礁域	II 内湾 - 航石域	III 河口干涸 - マングローブ域	IV 淡水域	V 陸域	VI その他	0 潮間帯上部	I - 0 ノッチ	II - 0 マングローブ	1 潮間帯中・下部	2 亜潮間帯上縁部	I - 2 イノーネ	3 干瀬	4 磨斜面	5 止水	6 流水	7 林内	8 林内・林縁部	9 林縁部	10 海浜部	11 打ち上げ物	12 化石	
I 外洋 - サンゴ礁域	a 岩礁																							
II 内湾 - 航石域	b 航石																							
III 河口干涸 - マングローブ域	c 砂/泥																							
IV 淡水域	d 河川躍底																							
V 陸域	f 植物上																							
VI その他																								
0 潮間帯上部	5 止水																							
I - 0 ノッチ	6 流水																							
II - 0 マングローブ	7 林内																							
1 潮間帯中・下部	8 林内・林縁部																							
2 亜潮間帯上縁部	9 林縁部																							
I - 2 イノーネ	10 海浜部																							
3 干瀬	11 打ち上げ物																							
4 磨斜面	12 化石																							

第17表 卷貝出土状況(番号は図版28と対応)

番号	科名	貝種名	生息地	出土地																合計	個体数		
				完	殻	破	完	殻	破	完	殻	破	完	殻	破	形	頭	片					
1	ニシキウズ科	ギンタカハマ	1 - 4 - a																1	0 0 1			
2		サラサバティラ	1 - 4 - a	1		1													0 1 1				
-		ヤコウガイ	1 - 4 - a			1													0 0 2				
3	リュウテン科	ヤコウガイの巣	1 - 4 - a		2	2													4 0 4				
4		チヨウセンサザエ	1 - 3 - a		2		1												3 3 1				
5		チヨウセンサザエの巣	1 - 3 - a																7 0 0				
6	アマオブネ科	ココダカアマガイ	1 - 1 - b																1 0 0				
7		アマオブネ	1 - 1 - b																1 0 0				
8	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	1 - 2 - c																0 1 0				
9		コゲツノブエ	III - 1 - c																0 1 0				
10	ヘナトリ科	カワアイ	III - 1 - e																0 1 0				
11	スイショウガイ科	オハグロガイ	II - 2 - c																1 2 2				
12		マガキガイ	1 - 2 - c	3	1	4													1 9 0				
13		ホシヌミタ	1 - 2 - a																1 0 0				
-	タカラガイ科	ハナビラダカラ	1 - 1 - a																0 0 2				
14		ハナマルユキ	1 - 3 - a		1														1 0 4				
-		タカラガイ科不明	-			1													0 0 2				
15		ガンセキボラ	1 - 4 - a																1 0 0				
16	アツキガイ科	ツノレイシ	1 - 3 - a	1															1 0 0				
17		シラクモガイ	1 - 3 - a	1															1 0 0				
18		ツツレイシ	1 - 1 - a																1 0 0				
19	イトマキボラ科	ナガイトマキボラ	1 - 2 - a	1															1 0 0				
20		ミカドミナシ	1 - 2 - c																0 1 0				
21	イモガイ科	マダライモ	1 - 1 - a																0 1 0				
22		サヤガタイモ	1 - 1 - a																2 0 0				
-		イモガイ科不明	-		1	1													0 1 1				
-	巻貝不明				1														0 2 3				
24	ナガウニ科	パイプウニ	1 - 3 - a																1 0 0 3				
		合計		1	4	0	7	5	8	0	0	1	0	0	2	13	9	8	7	4	5	0	1
																			28	23	25	55	

\*完形と殻頭の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最小個体数「1」として数えた)

第18表 二枚貝出土状況（番号は図版29と対応）

番号	科名	貝種名	生息地	石組I	SDI1	SDI2	I層	II・I層	合計	個体数
				完形 殻頂 破	完形 殻頂 破	完形 殻頂 破	完形 殻頂 破	完形 殻頂 破	完形 殻頂 破	
				L R L R 片	L R L R 片	L R L R 片	L R L R 片	L R L R 片	L R L R 片	
1	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	II-2-c				1		1 0 0 0 0	1
2		ハイガイ	III-1-c				2	1 2	0 1 2 0 2	2
3	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II-2-c			1		1	1 1 0 0 0	1
4		シャゴウ	I-2-c			1	1		0 0 0 1 1	1
-	シャコガイ科	シャコガイ科不明	-		1	1			0 0 0 0 2	1
5		ヒメシャコ	I-2-a		2				0 2 0 0 0	2
6		オオシラナミ (シラナミ)	I-2-a		1				1 0 0 0 0	1
7	チドリマスオ科	イソハマグリ	I-1-c			1	1		1 0 0 1 0	1
8	マルスダレガイ 科	ホソスジナミ	II-1-c	1					0 1 0 0 0	1
9		スダレハマグリ	II-2-c				1		0 1 0 0 0	1
-	二枚貝不明			1	6		2		0 0 0 0 9	1
	合 計			0 0 0 0 1	0 1 0 0 7	1 3 0 0 2	2 0 0 2 4	1 2 2 0 0	4 6 2 2 14	13

※完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片)でのみ出土した貝種については、最小個体数(1)と数えた)

第19表 陸産貝出土状況（番号は図版28と対応）

番号	科名	貝種名	生息地	出土地	完形	殻頂	破片	個体数
23	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	V-8	I層	1			1

## 第4章 総括

本章では鏡水原遺跡の調査成果について整理し、本報告の総括とする。

### 第1節 遺構

**石組遺構** 石組遺構は2基確認できた。遺構内には基本層序I層が堆積していたが、調査区周辺は戦後すぐに米軍による土地接收が行われていたため、接收直前まで使用されていた可能性がある。基本的に造りは同じで、地山を掘り込んで作られているが、石組1と石組2で遺構本体の造りに違いがみられることから、使用当時はそれぞれ異なる機能を持っていたと考えられる。

戦前の鏡水は製糖業が盛んで、現場周辺には水溜屋又砂糖屋（ミンタマヤースーター）があったことされていることから、それに関連する遺構の可能性もあるが、遺構の情報が少ないため詳細は不明である。

**石列** 石列は1基確認できた。拳大～50cm大の石灰岩を南西～北東方向に向けて配置している。

戦前の航空写真では、同じく南西～北東方向へ延びるラインが確認できることから、土留めもしくは土地区画を示すものとして利用されていたと考えられる。

**溝状遺構** 溝状遺構は7基確認できた。このうちSD1・2・6・7は平成30年度調査時に検出された遺構の延長部分にある。SD2・6・7は土地区画を示すものと考えられるが、SD1とSD12は規模や堆積状況が他とは異なっている。特にSD12に関して、戦前の航空写真では、同じ位置・方向に道が延びているのが確認できる。のことから、道と溝状遺構に何らかの関係性があったと思われるが、今回の調査では道に該当するような部分は確認できなかった。遺構内からは石器等の古い遺物も出土しているため、周辺からの流れ込みによって溝が埋まった後、その上に道が整備された可能性が考えられる。

**不明遺構** 不明遺構はSX3の1基のみ確認できた。平成30年度調査時に検出された遺構の延長部分にある。

戦前の航空写真では北西方向から延びる道と南西方向から延びる道が合流する様子が確認できるが、これはSD12とSX3の検出状況と概ね一致する。このことからSX3も道と関連性のある遺構だと考えられる。

**ピット** ピットは近世～近代のものが12基、縄文時代のものが42基確認できたが、どちらもプラン等は組め

なかった。

### 第2節 遺物

今回の調査で人工遺物は総計1,554点得られた。最も多く遺物が出土しているのはI層で729点となっており、次いでII・I層から362点、SD12から237点、SD1から85点と続く。種類別にみると最も多く出土しているのは本土産近代磁器で401点となっており、次いで沖縄産施釉陶器が378点、沖縄産無釉陶器が257点、明朝系瓦が116点と続く。縄文時代相当のIV層からも40点の遺物が得られ、そのうち34点は土器だが、全て小破片であった。遺物も含めIV層自体が周辺からの流れ込みによる堆積だと考えられる。

I層内に含まれる戦後の造成土からは陶磁器や瓦など生活に係るものが多量に出土しているが、鏡水原遺跡が所在する場所は戦前、耕作地が広がっており、終戦の年には既に米軍による土地接收・開発が行われている。おそらく戦前から戦後にかけての造成時に、周辺にあった安次齋集落・大嶺集落・鏡水集落などで使用されていたものが紛れ込んだため、耕作地との関連性の低い遺物が多く出土する傾向になったと考えられる。

### 第3節 結語

発掘調査の結果、鏡水原遺跡からは近世～近代と縄文時代の遺構を確認することができた。近世～近代の遺構として土地区画を示す溝や石列などが確認でき、これは戦前の航空写真の状況と概ね一致する。縄文時代の遺構はピットが確認できたが、プラン等は組めなかった。

調査区の西側はアスファルトや路盤材を撤去した時点でIV層や地山の赤土が確認でき、II層は皆無であった。東側に行くにつれてII層の堆積も厚くなっていることから、元々の地形は西から東にかけて緩やかな傾斜をしていた可能性がある。この点については米軍作成地形図（第6図）からもうかがうことができる。また、IV層は周辺からの流れ込みによる堆積と考えられるため、鏡水原遺跡の近隣に本体となる縄文時代の遺跡が所在している可能性がある。

ただし、鏡水原遺跡とその周辺は戦前に小禄飛行場が建設され、戦後は米軍による土地接收・開発を受け、現在は東側に陸上自衛隊那覇駐屯地、西側に国道332号線、沖縄都市モノレール（ゆいレール）、那覇空港となっていることから、戦前～現代にかけての土地利用が著しいことがわかる。それらの影響を受けて元々の地形が削平され、本体となる遺跡が既に消滅した可能性も考えられるだろう。



第30図 1944年撮影航空写真と近世～近代の遺構重ね図（道とSD12、SX3が重なるよう調査区の位置を微修正）

## 引用・参考文献

- 奄美市教育委員会 2007『小湊フワガネク遺跡群II 学校 法人日章園「奄美看護福祉専門学校」拡張事業に伴う緊急発掘調査報告書』一
- 上原静 1999『第二の大和系瓦』『読谷村歴史民俗資料館 紀要 第23号』読谷村歴史民俗資料館編
- 沖縄県教育委員会 1995『湧田古窯跡(II)』県庁議会 棟建設に係る発掘調査ー』第121集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001『天界寺跡(I)ー首里城地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査ー』第2集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡ー御内原北地区発掘調査報告書(I)ー』第54集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)ー』第58集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡ー平成22~26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書ー』第75集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『首里城跡ー錢藏地区発掘調査報告書ー』第77集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(5)ー』第84集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『東村跡ー沖縄県立離島児童生徒支援センター建設に伴う緊急発掘調査報告書ー』第92集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2018『中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6)ー』第95集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『神仙古集落ー普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書ー』第99集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『大嶺村跡 那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第101集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019『中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)ー』第102集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2020『真珠道路・松崎馬場跡ー県営首里城公園整備に伴う発掘調査報告書ー』第105集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『鏡水原遺跡ー那覇空港自動車道(小禄道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』第108集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(8)ー』第109集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2021『中城御殿跡(首里高校内)ー櫻園跡ー首里高校校舎改築に伴う発掘調査(2)ー』第110集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2022『普天間石川原第一遺跡 普天間グスクンニー遺跡 普天間下原古墓群ーキャンブ瑞慶観内東普天間住宅地区に係る文化財発掘調査報告書ー』第111集
- 鏡水自治会 1983『鏡水八十周年記念誌』鏡水自治会
- 鏡水郷友会 2005『字鏡水創立百周年記念誌』鏡水郷友会
- 具志川村教育委員会 1989『清水貝塚』第1集
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998『沖縄のやきものー南海からの香りー』佐賀県立九州陶磁文化館
- 桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- 那覇市教育委員会 1997『壺屋古窯跡IIIー個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査ー』第38集
- 南風原町教育委員会 2010『津嘉山北地区旧日本軍壕群IIー津嘉山北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』第8集
- Angela Von Den Driesch 1976 "A Guide to Measurement of Animals Bones From Archeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology. Harvard University

# 図 版





アスファルト撤去作業



磁気探査作業

図版1 作業状況1



重機掘削作業



遺構検出作業1

図版2 作業状況2



遺構検出作業 2



遺構検出作業 3

図版3 作業状況 3



遺構検出作業 4



写真撮影作業

図版 4 作業状況 4



遺構実測作業



遺構測量作業

図版5 作業状況5



壁面清掃作業



調査区埋戻し完了

図版6 作業状況6



調査区遺構検出 北から



調査区遺構検出 北西から

図版7 遺構1



調査区遺構完掘 北から



調査区遺構完掘 北西から

図版8 遺構2



石組 1・2 完掘 北西から



石組 1 完掘 北東から

図版9 遺構 3



石組 1 穴部分



石組 1 穴部分 拡大



石組 1 半截 北から



石組 1 上部石・モルタル撤去後 北から

図版 11 遺構 5



SS 1 検出 南東から



SS 1 分層（調査区北壁） 南から

図版 12 遺構 6



SD 1 確検出 西から



SD 1 完掘 西から

図版 13 遺構 7



SD I 完掘 北東から



SDI2 検出 南東から

図版 14 遺構 8



SD12 分層（中央サブトレーンチ東壁） 西から

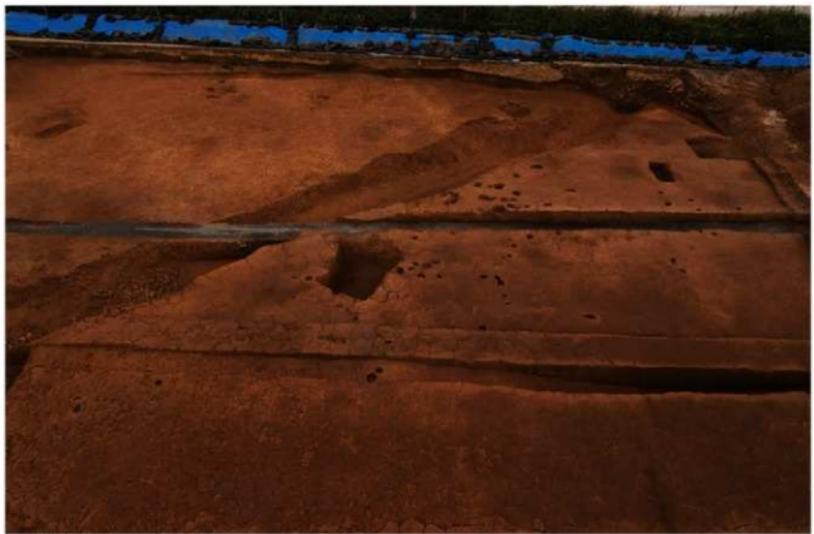


近世～近代遺構、IV層（中央右側の暗褐色土）検出 西から

図版 15 遺構9



ピット群（縄文時代）検出 北西から



ピット群（縄文時代）完掘 西から

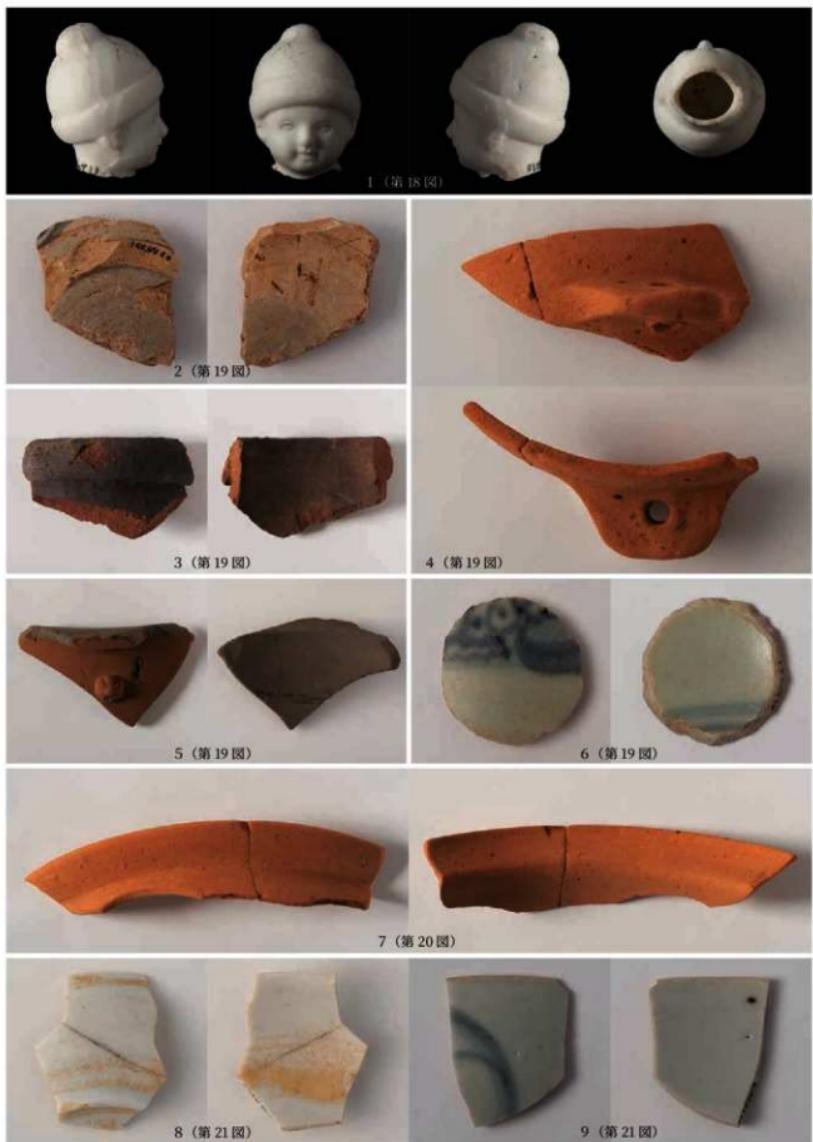


調査区北壁 南東から



調査区東壁 南西から

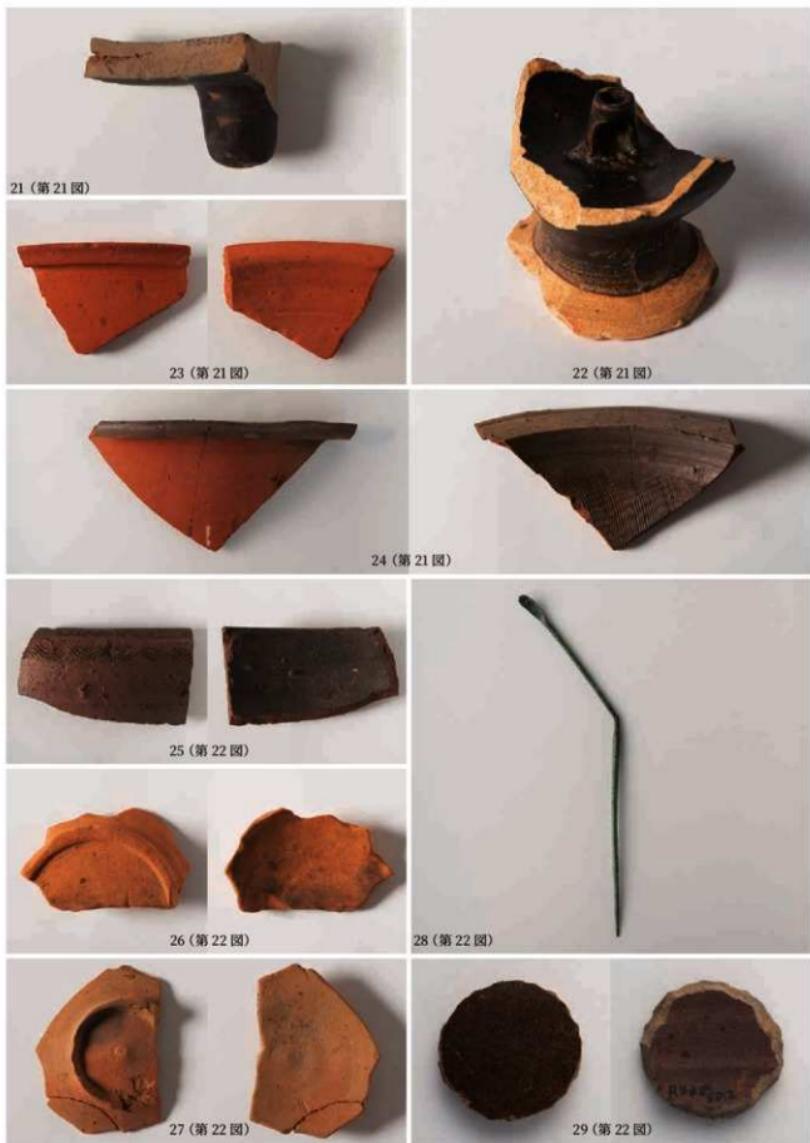
図版 17 壁面



図版 18 出土遺物 1



図版 19 出土遺物 2



図版 20 出土遺物 3



30 (第 22 図)



31 (第 22 図)



32 (第 22 図)

33 (第 23 図)

34 (第 23 図)

圖版 21 出土遺物 4



図版 22 出土遺物 5



図版23 出土遺物6



図版 24 出土遺物 7



図版25 出土遺物8

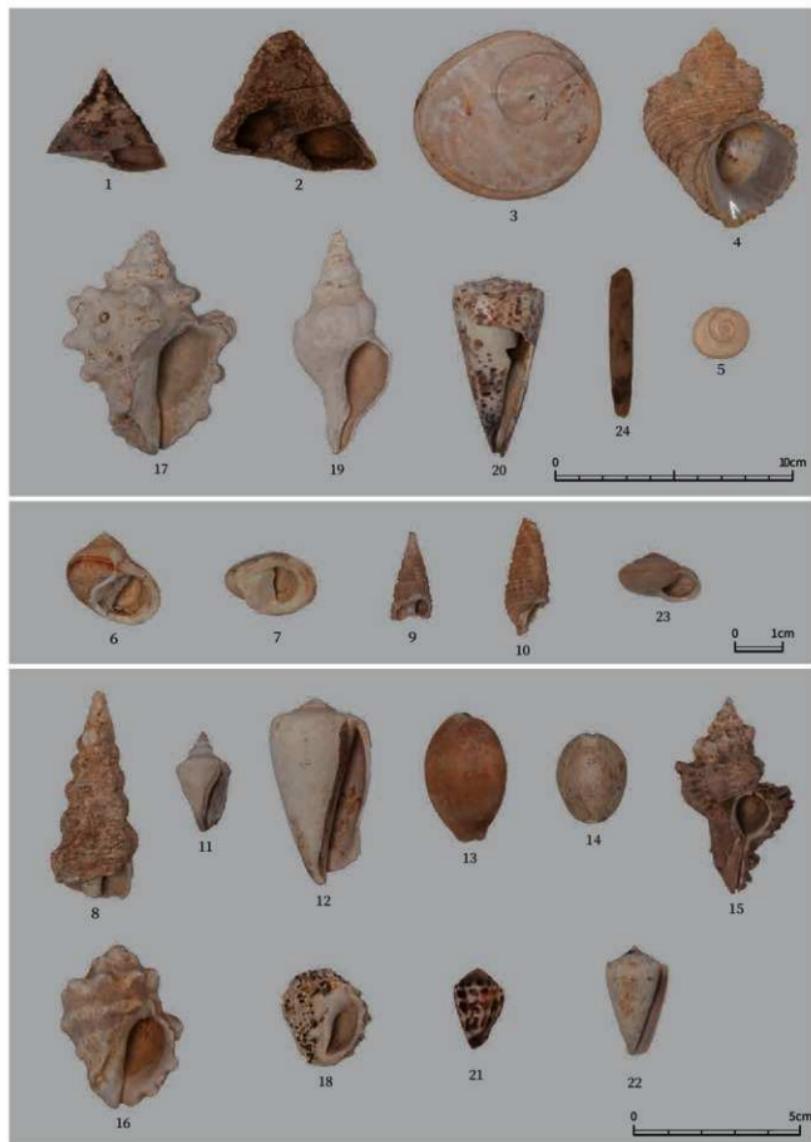


図版 26 出土遺物 9



図版 27 脊椎動物遺体

サメ類 1.椎骨 フエキダイ科 2.前上顎骨 左 ハリセンボン科 3.棘 イノシシ / ブタ 4.椎骨 右 (螺旋状剥片) 5.椎骨 左 (螺旋状剥片)  
ブタ 6.上顎C右 7.尺骨 左 (カットマーク、印切) 8.中手骨III左 9.蹠骨 右 (カットマーク) 10.中節骨  
ヤギ 11.寛骨 右 (カットマーク、打ち削) ウシ 12.上顎M<sup>1</sup>/M<sup>2</sup> 右 種不明 13.部位不明



図版 28 卷貝 (番号は第 20、22 表と対応)



図版 29 二枚貝（番号は第 21 表と対応）

第 20 表 巷貝出土一覧

番号	科名	貝種名	生息地
1	ニシキウズ科	ギンタカハマ	I - 4 - a
2		サラサバティラ	I - 4 - a
-		ヤコウガイ	I - 4 - a
3	リュウテン科	ヤコウガイの蓋	I - 4 - a
4		チョウセンサザエ	I - 3 - a
5		チョウセンサザエの蓋	I - 3 - a
6	アマオブネ科	コシダカラマガイ	I - 1 - b
7		ブローブネ	I - 1 - b
8	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	I - 2 - c
9		コグツブエ	III - 1 - c
10	ヘナタリ科	カワフイ	III - 1 - c
11	スイショウガイ科	オハグロガイ	II - 2 - c
12		マカガイ	I - 2 - c
13		ホシキタ	I - 2 - a
-	タカラガイ科	ハナビラダカラ	I - 1 - a
14		ハナマルユキ	I - 3 - a
-		タカラガイ科不明	-
15	アッキガイ科	ガンセキボラ	I - 4 - a
16		ツノイシ	I - 3 - a
17		シラクモガイ	I - 3 - a
18		アツレイシ	I - 1 - a
19	イトマキボラ科	ナガトイマキボラ	I - 2 - a
20	イモガイ科	ミカドミナシ	I - 2 - c
21		マダライモ	I - 1 - a
22		サヤガタイモ	I - 1 - a
-		イモガイ科不明	-
-	各貝不明		
24	ナガウニ科	バイブウニ	I - 3 - a

第 21 表 二枚貝出土一覧

番号	科名	貝種名	生息地
1	フネガイ科	リュウキュウサルボオ	II - 2 - c
2		ハイガイ	III - 1 - c
3	ツキガイ科	ウラキツキガイ	II - 2 - c
4		シャゴウ	I - 2 - c
-	シャコガイ科	シャコガイ科不明	-
5		ヒメシャコ	I - 2 - a
6		オオシラナミ(シラナミ)	I - 2 - a
7	チドリマスオ科	イゾハマグリ	I - 1 - c
8		ホソスジイナミ	II - 1 - c
9	マルスダレガイ科	スダレハマグリ	II - 2 - c
-	二枚貝不明		

第 22 表 陸産貝出土一覧

番号	科名	貝種名	生息地
23	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	V - 8

## 報 告 書 抄 約

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第113集

## 鏡水原遺跡

— 那覇空港自動車道（小禄道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—

発行日 令和5（2023）年3月17日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL：098-835-8751・8752 FAX：098-835-8754

印 刷 有限会社 サン印刷

〒 901-1111 沖縄県島尻郡南風原町兼城 577

TEL：098-889-3679